

# 東金市井戸ヶ谷遺跡

—房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—

1 9 9 2

水資源開発公団 房総導水路建設所  
財団法人 千葉県文化財センター

# いどがや 東金市井戸ヶ谷遺跡

—房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—



1 9 9 2

水資源開発公団 房総導水路建設所  
財團法人 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県東部には太平洋に接する長大な九十九里平野が形成されています。東金市はその九十九里平野の中央部と平野を望む丘陵上に所在し、重要な遺跡が数多く存在しています。水資源開発公団は、千葉県内陸部への工業用水の供給、九十九里地域への飲料水の供給を目的とする房総導水路建設事業の一環として、東金ダムの建設を計画しました。千葉県教育委員会では東金ダム建設に伴う工事用道路用地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、水資源開発公団と慎重に協議を重ねた結果、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることで、協議が整いました。

発掘調査は千葉県教育委員会の指導のもとに、財團法人千葉県文化財センターが実施することになり、平成元年7月から8月まで行い、その後平成2年4月から整理作業を実施してまいりました。

調査の結果、調査範囲の西半部については古墳時代から平安時代にかけての集落が、東半部については中・近世の墓域を検出することができました。とくに当該期の墓跡は県内では類例の少ない遺構であり、貴重な資料を提供することができたといえましょう。

このたび、それらの調査成果をとりまとめ、房総導水路関係の発掘調査報告書の第2集として『東金市井戸ヶ谷遺跡』を刊行する運びとなりました。

本報告書が学術資料として利用されることはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、さらに文化財の保護と普及のために広く一般の方々に活用されることを願ってやみません。

おわりに、発掘調査から報告書刊行にいたるまで、いろいろ御指導いただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課をはじめ、水資源開発公団房総導水路建設所、東金市教育委員会、地元関係諸機関の御協力にお礼申し上げるとともに、調査・整理に協力された調査補助員の皆様に心から感謝申し上げます。

平成4年3月

財團法人 千葉県文化財センター

理事長 岩瀬 良三

## 例　　言

1. 本書は千葉県東金市油井字長者屋敷538他に所在する井戸ヶ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. この調査は、房総導水路建設事業に伴う事前調査として、千葉県教育委員会の指導のもとに、水資源開発公団との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 調査で使用したコード番号は、213(市町村コード) - 007(遺跡コード)である。
4. 発掘調査は平成元年7月1日から平成元年8月31日まで実施した。調査対象面積は2,000m<sup>2</sup>である。現地の調査は、調査部長 堀部昭夫、調査部長補佐 西山太郎、班長 谷 旬の指導のもとに、主任技師 奥田正彦が担当した。
5. 整理作業は平成2年4月1日から平成4年3月31日まで実施した。作業は、班長 谷 旬、主任技師 糸川道行が担当した。
6. 本書は調査部長 堀部昭夫、天野努、調査部長補佐 阪田正一の助言のもとに、谷、糸川が編集した。執筆はI-1、IIを谷が、I-2・3、II、IVを糸川が行った。
7. 本書では遺構名を以下のように略記した。S I = 竪穴住居、S B = 据立柱建物、S X = 土壙墓・竪穴状遺構、S K = 土坑、S A = 橋列、S E = 井戸、S D = 溝、S F = 道路。
8. 本書に使用した地形図のうち、第1図は国土地理院発行の成東 (NI-54-19-11-1)・上総片貝 (NI-54-19-11-2)・八街 (NI-54-19-11-3)・東金 (NI-54-19-11-4)である。
9. 本書に使用した航空写真は京葉測量株式会社の撮影によるものである。
10. 遺物出土状況図で使用している記号は●が土器、■が金属製品、▲が石製品、○が土製支脚、◎が土製品、◎が炭化米である。
11. 現地調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から御指導・御協力をいただいた（敬称略）。深く謝意を表します。  
千葉県教育庁生涯学習部文化課、水資源開発公団房総導水路建設所、東金市教育委員会、  
(財)山武都市文化財センター、井上哲朗、今泉潔、大野康男、金子博英、栗田則久、  
郷原英司、小林清隆、小林信一、笠生衛、田形孝一、藤岡孝司、山口典子、渡辺修一。

# 本文目次

## 序文

## 例言

I 序章	1
1 調査に至る経緯	1
2 立地と周辺の遺跡	1
3 調査の概要	7
II 遺構	9
1 壺穴住居	9
2 掘立柱建物	19
3 土壙墓・壺穴状遺構	20
4 土坑・地下式土壙	30
5 横列	34
6 井戸	36
7 道路状遺構	36
8 溝状遺構	39
III 遺物	40
1 土器・陶磁器類	40
A 壺穴住居出土の土器	40
B 掘立柱建物跡出土の土器	46
C 土壙墓・壺穴状遺構出土の土器・陶磁器	46
D 土坑出土の土器・陶器	46
E 溝状遺構出土の土器・陶器	47
F 墨書き土器	48
G 遺構外出土の土器・陶器	49
2 土製品・瓦	50
3 石製品	52
4 金属製品	52
IVまとめ	55

## 挿 図 目 次

第1図 井戸ヶ谷遺跡と周辺の遺跡	3
第2図 調査地周辺の地形	4
第3図 S I 001・002	9
第4図 S I 003	11
第5図 S I 004・005	13
第6図 S I 006・007・008・009・010・S K 001・S D 001	15
第7図 S I 011	16
第8図 S B 001・004	18
第9図 S X 001	21
第10図 S X 002	23
第11図 S X 003A・S X 003B	24
第12図 S X 004	25
第13図 S X 005	26
第14図 S X 006	27
第15図 S X 007・008	29
第16図 土坑群(1)断面	30
第17図 土坑群(1)	31
第18図 土坑群(2)・S K 204	33
第19図 S K 201・202・203・S A 001	35
第20図 S E 001・003・S F 001・002・003	37
第21図 S D 002・003・004・005	38
第22図 S I 001・003出土土器	42
第23図 S I 004・005出土土器	43
第24図 S I 006・011出土土器	44
第25図 掘立柱建物跡・土壤墓出土の土器・陶磁器	45
第26図 土坑・溝状遺構出土の土器・陶器	47
第27図 墨書き土器	48
第28図 遺構外出土の土器・陶器	49
第29図 土製品・瓦	50
第30図 石製品	51
第31図 鉄製品	52
第32図 鉄製品・銅製品	53
第33図 錢貨	54

## 表 目 次

表 1 墓古土器一覧.....	48
表 2 鉄製品一覧.....	54
表 3 錢貨一覧.....	54

## 写 真 図 版 目 次

図版 1 井戸ヶ谷遺跡周辺の航空写真	図版 9 1 土坑群 (S I 003周辺)
図版 2 1 遺跡遠景 (南西から)	2 S D 004および周辺の土坑群
2 調査前近景 (東から)	3 土坑群 (S X 003・004周辺)
図版 3 1 調査前近景 (東から)	図版10 1 S K 204全景
2 調査前近景 (西から)	2 S E 001
図版 4 1 S I 006全景	3 S F 001全景
2 S I 003全景	4 S D 002
3 S I 003カマド土層	図版11 S I 003出土遺物
4 S I 003カマド遺物出土状況	図版12 S I 003・004・005・006出土遺物
図版 5 1 S I 004・005全景	S X 001・002出土遺物
2 S I 004全景	図版13 S X・S K・S D出土遺物
3 S I 011全景	遺構外出土遺物
図版 6 1 S B 004全景	図版14 遺構外出土遺物
2 S X 001全景	土製品
3 S X 002全景	図版15 文字資料集成
図版 7 1 S X 003A・B全景	図版16 1 鉄製品
2 S X 004全景	2 銅製品
3 S X 005全景	3 錢貨
図版 8 1 S X 006全景	図版17 1 瓦
2 S X 007全景	2 石製品
3 調査区東部の遺構および発掘風景	3 炭化米

卷末折り込み

## I 序 章

### 1 調査に至る経緯

水資源開発公団では、利根川水系から千葉県内陸部に工業用水を供給することを主たる目的とした房総導水路の一環として、東金市松之郷の地に「東金ダム」建設が計画された。同公団房総導水路建設所長は昭和63年6月3日にダム建設用地内について、同年12月27日には築堤用土搬入のための工事用道路用地内について「埋蔵文化財の有無およびその取扱い」を、千葉県教育委員会に照会した。現地踏査の結果、ダム用地内には井戸谷古墳群が、工事用道路用地内には井戸ヶ谷遺跡が確認され、昭和63年6月30日および平成元年1月19日付けでその旨の回答がなされた。

県教育委員会と水資源開発公団の間では、その取扱いについて慎重に協議が重ねられたがやむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査については県教育委員会の指導のもとに、(財)千葉県文化財センターが受託して実施することとなった。

調査は平成元年4月から開始した。当初契約ではダム建設用地内の井戸谷古墳群のみを対象にしたが、調査の進捗に従い、その下部にも集落跡（周辺の調査例から妙経遺跡の一部とする）が展開することが確認されたため、その取扱いについて協議が行われ、古墳群と併せて調査することとなり7月1日に変更契約がなされた。

その際、水資源開発公団からの強い要請で、工事用道路内の調査も併せて実施することになり、新規契約（その2）を締結し、7月1日から2か月の予定で開始した。

今回の報告は、契約（その2）に基づき発掘調査した工事用道路用地内に所在する井戸ヶ谷遺跡についてである。なお、昭和63年3月31日付けで刊行した「東金市久我台遺跡—房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書一」の続編として取り扱うこととし、その2番目である。

### 2 立地と周辺の遺跡

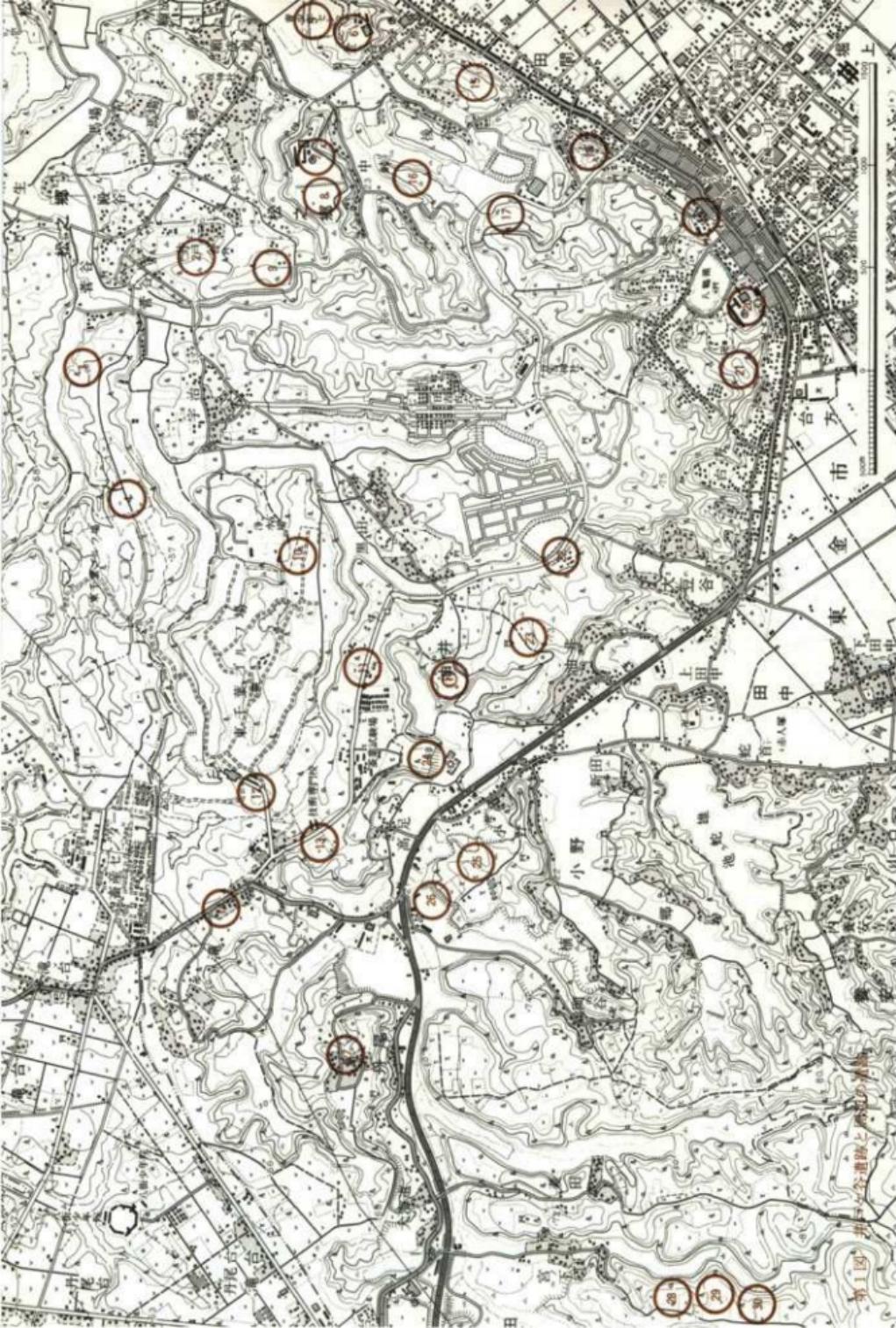
東金市の南東部は九十九里平野の中央となる海岸平野が形成され、北西部は下総台地に連なる上総丘陵が南へ行くほど起伏を増して展開している。東金市域では平野の丘陵沿いに国道126号線の旧道が成東町方面から続いている。126号線はちょうど東金市の中心街付近で大きく西方に迂回し、やがて千葉東金道路に接続し、ともに千葉市へと向かっている。また、JR東金線は東金市の中心街付近で126号線と交差し、道庭付近では126号線の東側を走って銚子へと向かっている。

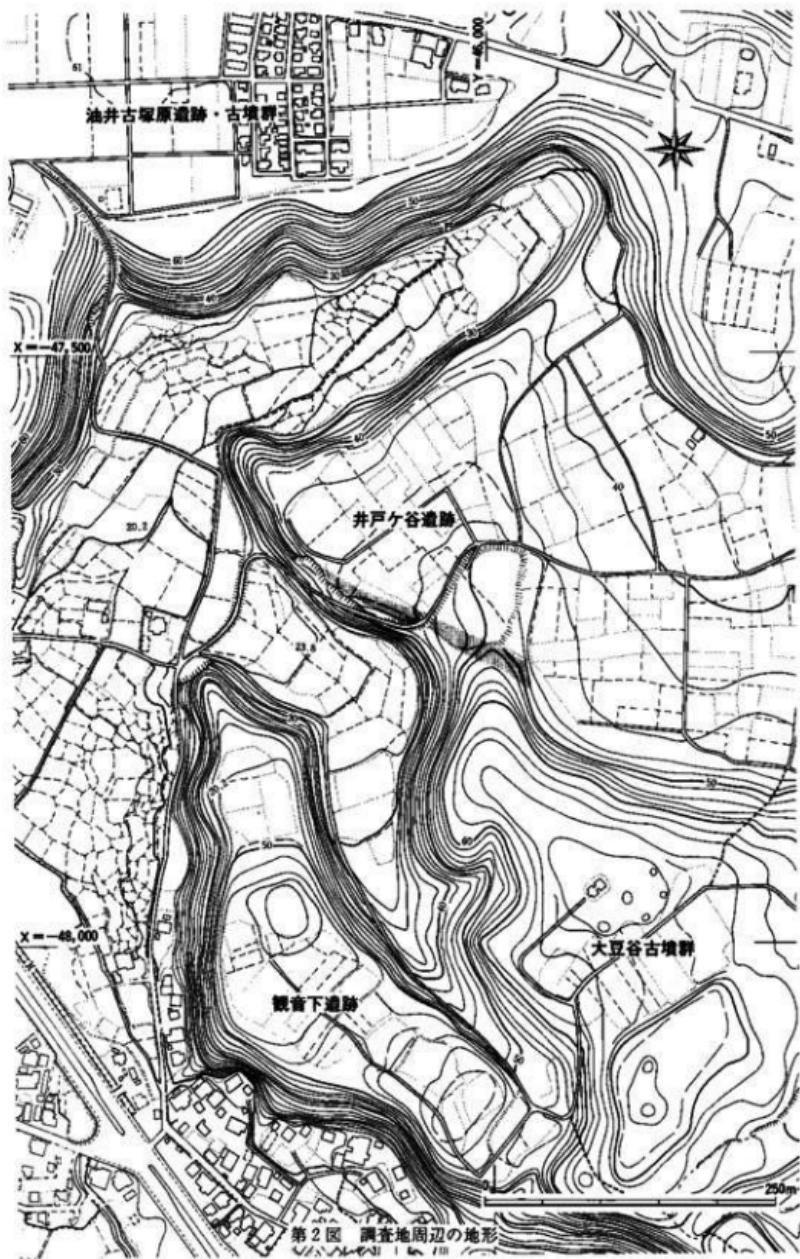
井戸ヶ谷遺跡は大回りしてきた126号線が千葉市方面へと向きを変えるやや手前の低地を見下ろす台地上に位置する。地形としては北幸谷川の小支谷に臨む舌状台地上に立地する。北幸

谷川は九十九里平野を流れる小河川で、現在は途中で他の小河川と合流し、真亀川となって太平洋に注いでいる。北幸谷川およびその支流は東金市西部の台地・丘陵を広く開析し、その小支谷は滝台遺跡の位置する八街市滝台付近、山田水呑遺跡の位置する山田インター・チェンジ付近、さらに大網山田台遺跡群の所在する台地・丘陵付近まで深く入り込んでいる。

井戸ヶ谷遺跡の所在する台地は北幸谷川の小支谷に向かって「く」の字状に張り出している。調査範囲はその「く」の字状の台地の南縁に位置する。標高は約45mから52mを測り、東西に長い調査区の西から東に向かって高くなる。井戸ヶ谷遺跡の東側部分の地形は第2図に図示することができなかったが、作田川支流の十文字川によって開析された支谷が北から入り込んでいる。台地全体もやや起伏に富み、標高約40m～50mを示す。周囲の開折谷は約20mから27mを測るので、比高差はおおむね20m～30m前後である。なお、この台地には、1979年に刊行された東金市の埋蔵文化財分布地図では井戸ヶ谷遺跡ほか走下遺跡、長者屋敷Ⅰ遺跡、長者屋敷Ⅱ遺跡の三遺跡が記載されているが、1988年に改訂された分布地図ではこれら四遺跡を併せて井戸ヶ谷遺跡としている。調査範囲は走下遺跡、長者屋敷Ⅰ遺跡、長者屋敷Ⅱ遺跡にかかる地点であるが、1988年の分布地図に従い、井戸ヶ谷遺跡という遺跡名で報告することとする。なお、遺跡範囲の問題でいえば別の問題となろうが、低湿地の調査が成果をあげている昨今では、台地下の谷田や斜面も今後、視野に入れていくべきであろう。

井戸ヶ谷遺跡の北方は比較的急な斜面を介して一段高くなっている、油井古塚原遺跡・古墳群が所在する。標高60m前後を測り、井戸ヶ谷遺跡との比高差はおおむね20mである。油井古塚原遺跡は東金市の分布地図によれば繩文・弥生・古墳・奈良・平安時代の重層遺跡である。1985年に山武郡南部地区文化財センター（現山武郡市文化財センター）によって行われた発掘調査では古墳時代および奈良時代の堅穴住居跡が検出されている。遺跡内の古墳群は前方後円墳7基・円墳38基から成り、東金市に所在する古墳群としては家之子古墳群について基数の多い古墳群である。過去に数回調査され、3基の円墳から軟質砂岩切石積みの横穴式石室が検出された。このうち、11号墳は直径約40mで、玄室内より環頭大刀・直刀・鉄鎌・金環・琥珀製玉類、須恵器長頸壺などが出土した。14号墳、17号墳も直刀・鉄鎌等を出土し、いずれも古墳時代後期の所産である。また、19号墳は全長45mの二重周溝を巡らす前方後円墳であるが、埋葬施設は検出されなかった。なお、過去の開発に伴う調査等で半数以上の古墳が消滅し、現在遺存している古墳は19基である。井戸ヶ谷遺跡の南方も同様に高くなり、標高70m前後のやや起伏に富んだ地形となる。大豆谷古墳群の所在する台地であり、井戸ヶ谷遺跡との比高差は20～30mを測る。大豆谷古墳群は方墳1基・円墳11基から構成される。山林であり、遺存状況は良好である。井戸ヶ谷遺跡の南や西方には谷を介して幅の狭い台地があり、観音下遺跡が所在する。古墳時代後期から奈良・平安時代を主体とする遺跡と推定される。これまで発掘調査は行われていない。





以上、井戸ヶ谷遺跡のごく周囲の遺跡を概観したが、次に、もう少し広い範囲に目を広げることにする。著名な遺跡および各時代の遺跡については、房総導水路関係の最初の報告書である久我台遺跡の報文に記載されているので、ここでは今回の調査成果を考慮し、古墳時代以降で発掘調査された遺跡および中・近世の遺跡を中心に述べていきたい。このような方針によりとりあげた遺跡は以下の通りである。(第1図参照)

第1図に掲載した遺跡名一覧

- |                 |                 |                |
|-----------------|-----------------|----------------|
| 1. 井戸ヶ谷遺跡       | 2. 井戸向遺跡        | 3. 城坂城跡        |
| 4. 苗谷古墳群・南外輪戸遺跡 | 5. 東金平藏台遺跡      | 6. 平藏台城跡       |
| 7. 久我台城跡        | 8. 久我台遺跡        | 9. 妙経遺跡・井戸谷古墳群 |
| 10. 滝東台遺跡       | 11. 油井古塚原遺跡・古墳群 | 12. 滝木浦Ⅱ遺跡     |
| 13. 作畠遺跡        | 14. 外荒遺跡        | 15. 田間城跡       |
| 16. 中谷遺跡        | 17. 海老ヶ谷遺跡      | 18. 上行寺裏横穴群    |
| 19. 岩崎横穴群       | 20. 東金御殿跡       | 21. 東金城跡       |
| 22. 大豆谷館        | 23. 大豆谷古墳群      | 24. 油井館        |
| 25. 小野城跡        | 26. 小野遺跡        | 27. 丹尾館        |
| 28. 新林Ⅰ遺跡       | 29. 新林Ⅱ遺跡       | 30. 新林Ⅲ遺跡      |

28・29・30は大網山田台遺跡群No3地点である。

まず、古墳時代の遺構が検出された遺跡としては井戸向・妙経・久我台・平藏台・海老ヶ谷・南外輪戸<sup>9</sup>・滝東台<sup>5</sup>・作畠<sup>13</sup>・小野<sup>14</sup>・大網山田台遺跡群などの遺跡があり、奈良・平安時代の遺構が検出された遺跡としては、先述の遺跡のうち平藏台遺跡を除いた各遺跡に加え、中谷<sup>9</sup>・外荒<sup>15</sup>・滝木浦Ⅱ遺跡<sup>12</sup>がある。平藏台遺跡でも平安時代の土器が出土しているので、該期の集落が存在する可能性がある。先述した油井古塚原・大豆谷古墳群の他に、発掘調査が行われた古墳としては、苗谷古墳群第1号墳<sup>12</sup>および井戸谷古墳群第9号墳<sup>10</sup>がある。苗谷1号墳は遺存状況が不良のため、埋葬施設は未検出で古墳に関係する遺物の出土も無かった。井戸谷9号墳は軟質砂岩切石積みの横穴式石室で、盗掘にあい副葬遺物は鉛ガラス勾玉・五弁の飾り金具片など貧弱であったが、周溝からは古墳時代から奈良・平安時代の遺物が大量に出土した。九十九里平野に面する台地斜面には各所に横穴が設けられているが、そのうち、上行寺裏横穴群と岩崎横穴群<sup>17</sup>が調査されている。ただし、岩崎横穴群は航空測量のみで発掘調査は行われていない。また、上行寺裏横穴群は出土遺物が無く、年代比定は困難である。第1図には掲載しなかったが、山武郡市文化財センターが調査した大網白里町の瑞穂横穴群では、出土遺物から7世紀初頭に築造が始まり10世紀代まで使用されたと考えられており、他の横穴群の年代を推定する手掛かりとなる<sup>18</sup>。次に、中・近世の城館として第1図に城坂・平藏台・久我台・田間・東金<sup>19</sup>・小野の各城跡・大豆谷・油井・丹尾の各館跡を示した。これらの多くは千葉氏や酒井氏の城砦で

ある。城館以外の中世の遺跡については調査例が乏しいが、久我台遺跡では地下式壙などの土壙が検出された。この土壙群から15~16世紀の常滑、瀬戸・美濃系陶器が出土し、当時、台地上は墓域であったことが分かる。近世になると東金御殿が築かれた。これは徳川家康が鷹狩を行なうさいに設置された施設である。

#### 註

1. 「山田水呑遺跡」日本道路公団・山田遺跡調査会 1977
2. 「大網山田台遺跡-1983年度確認調査概要-」大網山田台遺跡調査会 1984
3. 「千葉県東全市埋蔵文化財分布地図」東全市教育委員会 1979
4. 「千葉県東全市埋蔵文化財分布地図」東全市教育委員会 1988
5. 「千葉県東全市 滝東台遺跡 油井古塚原遺跡」(財)山武郡南部地区文化財センター 1986
6. 丸子亘「千葉県東全市家之子古墳群緊急発掘調査概報」「立正大学文学部論叢第三十号」 立正大学文学部 1968
7. 川戸彰「東全市油井古塚原古墳群調査の意義」「東金文化協会会報6・7・9・10」東金 文化協会 1967  
「油井古塚原古墳群第1号墳発掘調査報告書」東全市油井古塚原古墳群調査会 1983
8. 「東全市久我台遺跡」(財)千葉県文化財センター 1988
9. 「東金台遺跡I」東金台遺跡調査団 1980
10. 1988年の東全市分布地図の井戸谷古墳群にあたる地点が房総導水路関係の事前調査の対象となり、1989年度に発掘調査を実施したが、多数の竪穴住居跡が検出されたため、隣接している妙経遺跡の範囲を拡大して考え、古墳以外の遺構については妙経遺跡、古墳については井戸谷古墳群と称することにした。また、従来の妙経遺跡の範囲の一部は東金台遺跡群の一つとして「東金台遺跡I」に報告されている。
11. 「東金平蔵台遺跡」千葉県教育委員会 1970
12. 「東全市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡 滝木浦II遺跡発掘調査報告書」東全市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡調査会 1985
13. 「作畠遺跡発掘調査報告書」山武考古学研究所 1986
14. 「昭和63年度 東全市内遺跡群発掘調査報告書-小野遺跡-」東全市教育委員会 1989  
「平成元年度 東全市内遺跡群発掘調査報告書-小野遺跡B地区-」東全市教育委員会 1989
15. 「東全市・外堀遺跡発掘調査報告書」(財)千葉県文化財センター 1988
16. 「上行寺裏横穴 6、7号横穴発掘調査報告書」東全市上行寺裏横穴群調査会 1983
17. 「千葉県東全市 岩崎横穴群」(財)山武郡南部地区文化財センター 1989
18. 「千葉県大網白里町 瑞穂横穴群」(財)山武郡南部地区文化財センター 1986

19.『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第9集—東金城跡・城山城跡発掘調査報告一』

(財)千葉県文化財センター 1989

20.『東金市小野城跡』(財)山武郡南部地区文化財センター 1986

### 3 調査の概要

井戸ヶ谷遺跡は東金市油井字長者屋敷538他に所在する。調査対象面積は2,000m<sup>2</sup>で、幅5~15m、延長距離約210mと細長い調査区域である。調査は平成元年7月1日から8月31日まで実施した。

現地の調査にあたっては国土地理国家座標(第IV座標系)を使用した基準点測量を行い、20mごとに方眼の地区割りを行った。方眼は東西方向を西から東にアルファベットでA~J、同様に南北方向を北から南に算用数字の1~6まで振り付け、アルファベット・算用数字を組み合わせて大グリッドを設定した。大グリッド名はB1, C2, D2…のように呼称した。20m四方の大グリッドをさらに4m四方に分割し、一つの大グリッドにつき、25個の小グリッドを設定した。小グリッドの番号は大グリッドの北西隅を00とし、東西方向は東へ順次送って04まで、南北方向は北から一桁代・10番代・20番代・30番代・40番代と設定し、南北方向・東西方向の交点の数字の組合せで、たとえばH4-33のように小グリッドの呼称をした。大グリッドのなかの最小数字は00、最大数字は44である。5~9の数字は使用していない。

発掘調査は、まず上層の確認調査として調査区全域に主として4×2mの確認トレンチを配し、対象面積の10%、200m<sup>2</sup>の調査を実施した。その結果、調査区の東端部を除き遺構が検出されたため、1800m<sup>2</sup>を上層本調査範囲とした。その後、バック・ホウによって表土を除去し、遺構の検出を行った。検出した遺構は凡例で述べた通り遺構の種類で区別し、S1001, S2001のようにアルファベットの後に三桁の数字を与えて、番号を付けていった。本報告書では発掘時に付けた遺構番号をほぼ踏襲しているが、一部、改称した。また、整理作業の結果、欠番となったものもある。それらについては次項で触れたい。なお、遺物番号の注記は旧番号を行った。

発掘調査が始まって一ヶ月後の8月1日の夕刻、集中豪雨により調査区西端部の斜面際の土砂が崩落するという事態が起こった。現場作業は遺構の精査中であったが、調査区西端部の遺構は危険が大きすぎるため、調査の遂行が不可能となり、確認時プランの記録しか取れなかった。それら以外の上層遺構の調査後、下層の確認調査を対象面積の4%、80m<sup>2</sup>について行ったが先土器時代の遺物は確認グリッドからは確認されなかった。土砂崩落によって生じた災害復旧作業にあたったことや調査区東半部において層序の乱れがあり、遺構確認が難しかったことなどから調査の進捗は苦しくなったが、どうにか8月31日で調査を終了することができた。整理作業は、平成2年度に水洗・注記・復元・遺物実測・遺構・遺物のトレースおよびおおよそ

の挿図の作成を行った。平成3年度には遺物写真の撮影・残りの挿図および写真図版の作成・原稿執筆を行い、平成4年度の報告書刊行となった。

検出した遺構は堅穴住居（S I）11軒、掘立柱建物（S B）2棟、土壙墓および堅穴状遺構（S X）9基、土坑（S K）121基、地下式土壙（S Kとした）1基、横列（S A）1基、井戸（S E）2基、溝状遺構（S D）5条、道路状遺構（S F）3条である。なお、地下式土壙は土坑の項で扱った。先土器時代の遺物は確認グリッドからは検出されなかったが、1基の土坑覆土からナイフ形石器が1点出土した。縄文時代では遺構は確認されなかったが、土壙墓から局部磨製石斧が1点出土した。また、縄文土器片が1点堅穴住居から出土したが、図示に耐える資料ではなかった。以上縄文時代の遺物は僅かな数量であり、遺構があったとしてもその分布は稀薄であると思われる。弥生時代の遺構・遺物は全く検出されなかった。古墳時代も前期では遺構・遺物が検出されなかったが、後期になると堅穴住居が作られるようになり、以後、奈良・平安時代まで認められる。堅穴住居の分布は道路を挟んで調査区西半部に多く東半部に少ないが、墨書き土器などの遺物分布を見ると東半部では後世の土壙墓や土坑群に破壊された可能性が大きい。古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての集落は台地全体に広範に展開していると思われる。中世になると調査区東半部の台地には土壙墓・堅穴状の遺構および地下式土壙が作られ、墓域として使用されたことが分かる。根拠に乏しいが、土坑群の多くも墓域である可能性を考えたい。墓域の範囲は調査区の南北に広がるが、南側は地形からすると端に近いと思われる。横列は出土遺物からの時期比定は困難だが、方向から土壙墓と同時期かもしれない。溝状遺構のうち1条は土壙墓を切り、1条は切られていると思われる。その他の遺構については明確に時期を比定する根拠に恵まれなかった。

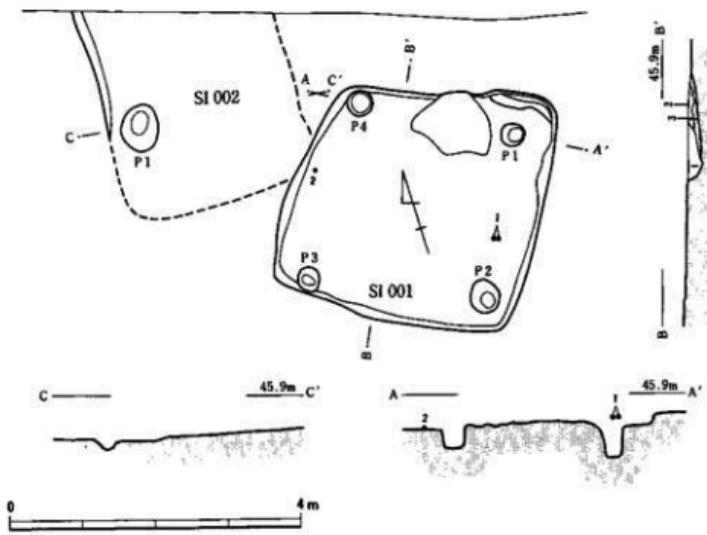
## II 遺構

### 1 壁穴住居

#### S I 001(第3図)

調査区中央やや西寄りのE 2 グリッドに位置し、S I 002と重複関係にある。本跡・002とも遺存状況が悪く、床面ないし掘形のみの遺存である。確認時の観察により本跡の方が新しいと判断した。遺構平面形は遺存状況が悪かったため、不整な方形である。プランは掘形の精査により検出した。本跡は一辺3.6m前後か、あるいはそれをやや上回る程度の規模と推測される。カマドと南壁中央を結んだラインで主軸方向を求めるにN-31°-Eとなる。掘形は住居中央部が高く、四隅およびカマド前面がやや深く掘られ、凹凸が激しい。壁溝はカマド東の北東コーナーにのみ遺存する。僅かに2~3cm窪む程度の深さである。P1・P2・P3・P4は柱穴である。径は30cm~45cmを測る。深さはP1が45cm、P2が37cm、P3が15cm、P4が28cmである。掘形同様、柱間も歪んだ方形で、寸法はP1~P2は2.3m、P2~P3は2.5m、P3~P4も2.5m、P1~P4は2.2mを測る。掘形の覆土は1~3層とも暗褐色土であるが、1,3層はローム粒・塊の含有が多く、2層は少ない。また、1,2層は焼土粒を少量含む。カマドは北壁中央に位置するが、掘形のみの遺存で上部は全く失われていた。

遺物の出土は土器片が22点と少量である。散在的に出土した。8世紀代の土器も認められる



第3図 S I 001・002

が、9世紀代のものがより多いと思われる。

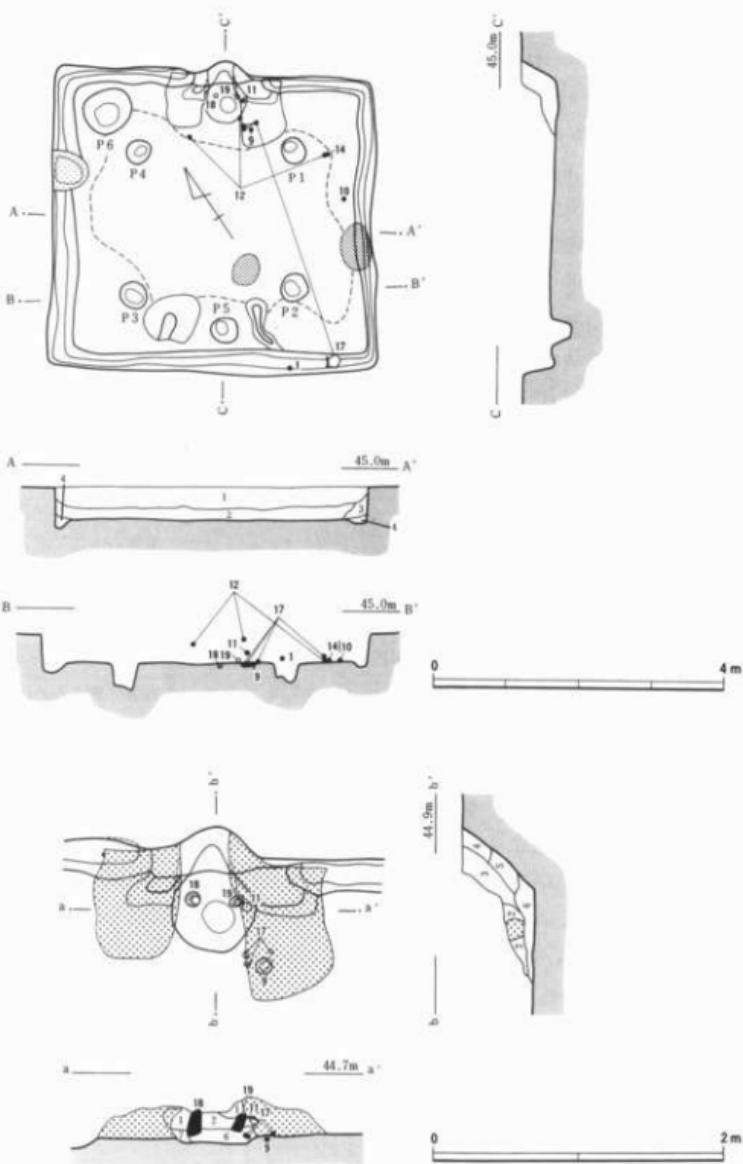
#### S I 002(第3図)

調査区中央やや西寄りのD 2・E 2グリッドに位置し、S 1001と重複関係にあり、本跡が切られている。南半部のみの調査で北半部は調査区外になる。床面のみの遺存で、僅かに西壁の一部が検出された。遺構平面形は不明瞭ながら方形を呈すると推測される。規模不明。遺存した西壁の方向はほぼ南北方向に沿っているが、カマドの位置が不明であり、そのため主軸方位も不明である。柱穴は検出されなかったが、床面の精査でP1を検出した。径65~50cm、深さ12cmの浅い皿状の掘り込みである。本跡に伴うものであるかどうか判然としない。掘形の掘り込みはほとんど無く、床面はほぼ平坦であったと思われる。

出土遺物は土器師・須恵器片が合わせて5点と僅少である。遺物の時期は平安時代と思われるが、住居の時期を比定する資料としては心許無い。

#### S I 003(第4図 図版4)

調査区西半部中央のC 2・D 2グリッドに位置する。約1m離れてS B 001がある。また、周囲と本跡に重複して幾つかのピットがあり、掘立柱建物の可能性があるが、調査範囲の制約もあって決定し得なかった。遺構平面形は正方形に近いが、やや横長で、規模は4.4×4.1mを測る。床面積は14.2m<sup>2</sup>である。北東壁中央にカマドが設けられており、出入口ピットとカマドを結んだ主軸方位はN-34°-Eである。確認面から床面までの深さは45cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁下には壁溝がカマド部分を除き全周する。壁溝の幅は15cm~35cmと場所によって異なるが、北西壁、南西壁は比較的幅が広い。深さは10cm前後である。主柱穴は対角線上に4本配され(P1~P4)、径は35cm前後、深さはP1が35cm、P2が25cm、P3が36cm、P4が40cmを測る。柱間寸法はP1~P2が2.0m、P2~P3は2.3m、P3~P4は2.0m、P1~P4は2.05mを測る。P5は出入口施設に伴うピットで上部は擾乱を受けているが、径35cm前後、深さ30cmを測る。P5両脇はやや盛り上がっており、出入口施設に伴うものと考えられる。左脇はロームブロックで盛土をしていた。カマド左脇に深さ6cmと深い皿状の窪みがあり(P6)、位置的に貯蔵穴かとも思われるが、本跡の時期は8世紀後半と考えられるので、時期を考慮すると否定的か。本跡周辺のピット同様、掘立柱の可能性もあるピットと考えておきたい。床面は比較的平坦で堅緻である。壁際を除いて広い範囲が硬化面となっている。北西壁中央やや北寄りに壁溝を切って深いピットがあり、そこに焼土が堆積していた(粗い網の範囲)。本跡に伴うものとは思われない。また、床面および壁溝上に砂質粘土の堆積が認められた(細かい網の範囲)。これはカマドから遠いので、他所から捨てられたものと思われる。覆土は1層~3層が暗褐色土で、2層はローム粒の含有がやや多く、1,3層は少ない。4層はロームを主体とする土層である。また、全体的に少量の焼土粒と炭化粒を含む。カマドは天井部及び袖上部を欠失する。右袖は遺物を覆っているように図示しているが、流れた砂質粘土をカマド範囲とした可能性があるよ



第4図 SI 003

うに思われる。壁の突出はあまり強くない。袖基部は地山を掘り残して作り出しており、当初からカマドの位置を決めて構築された事が分かる。火床部は浅く皿状に窪む。被熱による赤変は弱い。覆土は1層と3層が砂質粘土主体土で、1層は暗褐色土をやや多く、3層は少量含む。2,6層は焼土粒・塊を多く含む褐色土で、特に6層は焼土塊、灰を多く含む。4層、5層はローム粒を少量含む黒褐色土で、5層の方が黒色味が強い。7層は灰を含む黑色土である。なお、右袖の最下部に薄く黑色土の堆積が認められた。砂質粘土でカマドを構築する前の基底部の土層である可能性がある。

土器片の出土量は約310点である。カマド周辺の集中度がやや高い。レベルは床面ないし床面に近い遺物が多い。須恵器杯(1)は床面よりやや浮いて、土師器杯(9・10)は床面から出土した。土師器壺(17)は、カマド内と南コーナー付近と離れた位置の土器片が接合した。また、支脚が2個体、カマド内で火床から浮いて正立の状態で出土した。その他、刀子等の鉄製品が少量出土した。土器の全体的な様相としては、古墳時代や平安時代の遺物も少量認められるが、奈良時代のものが最も多い状態を示している。

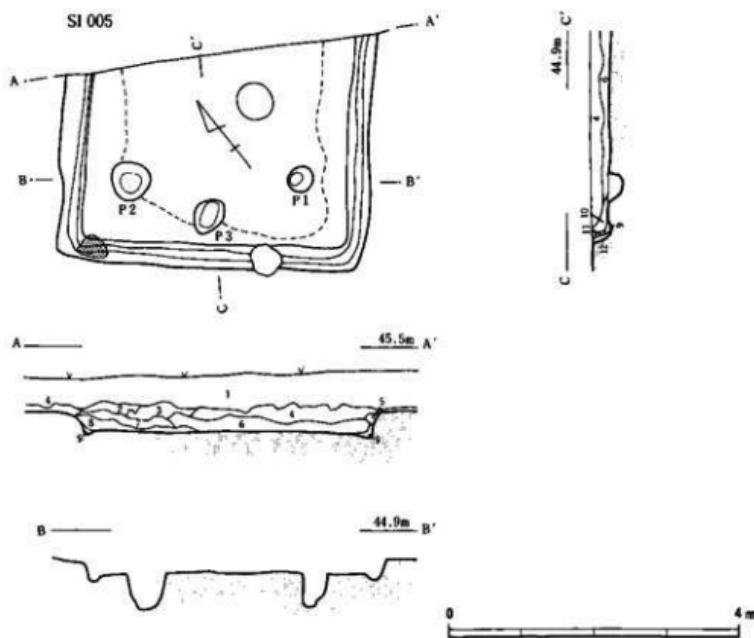
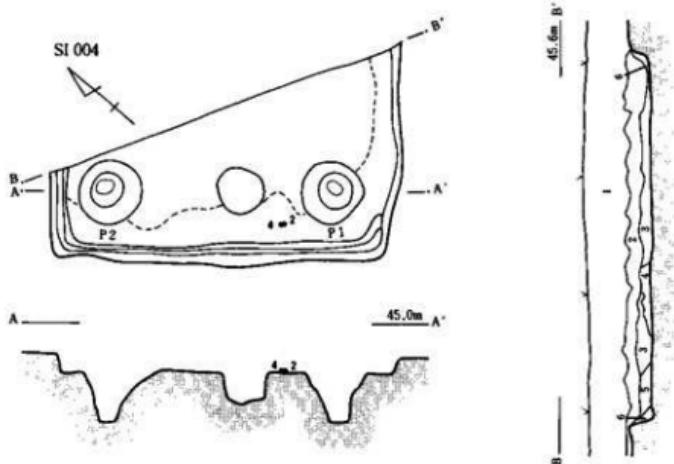
#### S I 004(第5図 図版5)

調査区西半部中央のC 2グリッドに位置する。重複してはいないが、本跡の西ごく至近の位置にS I 005がある。本跡とS I 005の同時存在は不可能であるように思う。南西半部のみの調査で北東半部は調査区外となる。カマドは未検出で、調査区外に所在すると思われる。遺構平面形は方形を呈すると推測される。規模は南西壁で4.65mを測る。主軸方位はカマドが北東壁にあると想定するとN-50°-Eとなる。確認面から床面までの深さは30cm、表土からの深さは90cmを測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁溝は北西壁・南西壁に巡るが、南コーナー付近でとぎれ、南東壁では検出されなかった。幅は平均25cm、深さ2~3cmと浅いので南東壁にもあった可能性がある。床面から主柱穴が2本確認された(P1・P2)。他の2本は調査区外であろう。P1・P2間は径80~90cm、深さ70cmを測る。径が広いのは柱が抜き取られたためであろうか。P1・P2間は3.2mを測る。また、P1・P2間にピットが検出されたが、本跡に伴うものではないと思われる。床面はほぼ平坦である。硬化面が壁際を除いて認められる。覆土は1層が表土、黒褐色土、2,3,5層が暗褐色土で、3,5層はローム粒をやや多く、2層は少量含む。また、5層は砂質粘土を少量含む。4層は黄白色砂質粘土を多く含む茶褐色土、6層はロームを主体とする土層である。その他、全体的に焼土粒・炭化粒を少量含んでいる。

遺物の量は土器片が約70点と少ない。床面に接して土師器高杯(2)、手捏土器(4)が出土した。また、小破片であるが、畿内産土器が2点出土した。本跡の遺物は全体的には古墳時代の遺物が多いように思われる。

#### S I 005(第5図 図版5)

調査区やや西寄りのC 1・C 2グリッドに位置する。重複していないが、本跡の東ごく至近



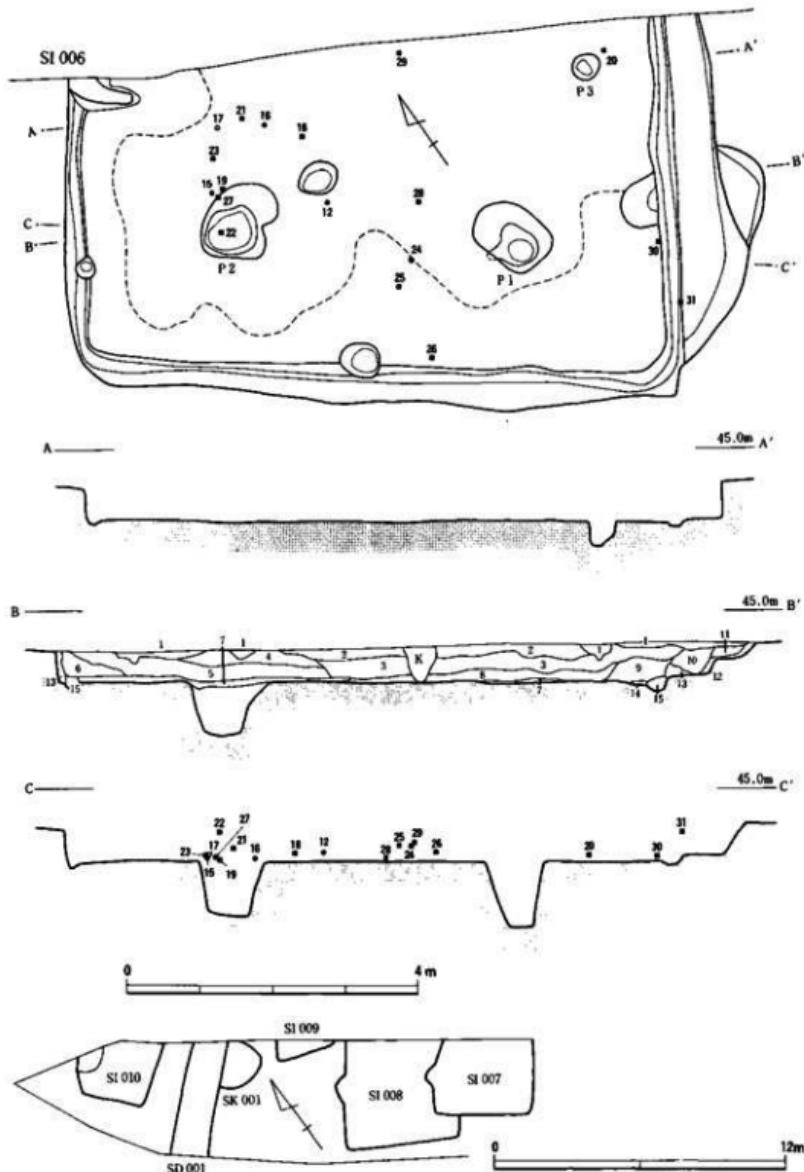
第5図 SI 004・005

の位置に S I 005がある。住居面積のはば3分の2の調査で、北東壁側3分の1は調査区外である。カマドは未検出で、北東壁にあると考えられる。造構平面形は方形を呈すると推測される。規模は南西壁で4.25mを測る。主軸方位はカマドが北東壁にあると想定し、南東壁の方向で求めると N-42°-Eとなる。確認面から床面までの深さは30cm弱、表土からの深さは80cm前後を測る。壁の立ち上がりはやや外に傾く。壁溝は全周すると思われる。幅は30cm平均だが、コーナー付近以外の北西壁下で40cm弱に広がる。深さは7-8cm前後である。床面から主柱穴が2本確認された（P1・P2）。他の2本は調査区外に位置すると思われる。P1は径35cm前後、深さ45cmを測り、P2は径50cm強、深さ40cmを測る。P1・P2間は2.3mを測る。P3は出入口施設に伴うピットで、径40-50cm、深さ20cmを測る。床面中央寄りのピットと南西壁を切っているピットは本跡に伴うものとは思われない。床面はほぼ平坦で堅緻である。硬化面が壁際を除いて認められた。その他、西コーナー付近の床面に砂質粘土が堆積していた。覆土は黒褐色土および暗褐色土を主体とする。1層は表土、暗褐色土層、2層は黒褐色土で、暗褐色土をプロック状に含む。3,4,6,7,8,10層はローム粒・塊を少量含む暗褐色土である。3層は黒色味が強く、4層はローム粒をやや多く、7,8層は砂質粘土粒をやや多く含む。5,9層はローム粒・塊を多く含む暗褐色土、11,12層はローム粒を主体とする土層である。

遺物は約240点の土器・須恵器が出土した。破片のため、時期を確実に把えることのできる遺物が少ない。奈良時代以降の遺物も少量見られるが、量的には古墳時代後期の遺物が多いように思われる。

#### S I 006(第6図 図版4)

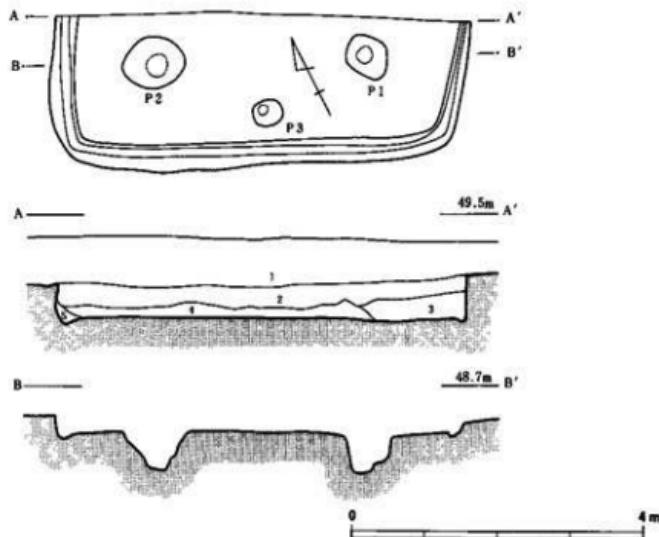
調査区西寄りのB 1・C 1グリッドに位置する。本跡の西方ごく近いところにS I 007が、東に約2m離れてS I 005がある。本跡とS I 007との同時存在は不可能と思われる。本跡は南西半部のみの調査で北東半部は調査区外となる。造構平面形は南東壁がやや不整であるが、それを除けば方形を呈すると推測される。南東壁は壁溝から外側に平坦面を持って張り出し、そこから立ち上がる。この張り出し部は一部、二段となる。なお、この部分は調査時の観察所見では掘り過ぎではなく、本跡に伴うものとしている。壁溝はやや内に入って巡る。規模は南西壁で8.3m、南東壁張り出し部を含めた長さは、最大で9.6mを測る大型の住居である。北西壁でカマドの一部、左袖のみを確認した。他は調査区外である。北西壁の中央に位置するカマドである。主軸方位を南西壁の方向で求めると、N-53°-Wとなる。確認面から床面までの深さは40cm-50cmを測る。壁は北西壁ではほぼ垂直に、南西壁でやや外傾して立ち上がる。南東壁張り出し部は、壁中央付近は垂直に、南コーナー付近ではなだらかに立ち上がる。壁溝は全周すると思われる。幅は場所によって異なるが、最小幅は約20cmである。深さは7-14cmを測り、比較的深い。床面からは幾つかのピットが検出された。P1・P2は主柱穴である。他の主柱穴は北側の調査区外にあると考えられる。P1、P2とも不整な形態であり、柱が抜き取られたも



第6図 SI 006・007・008・009・010・SK 001・SD 001

のと思われる。P1は径80cm～100cm、深さ1m、P2は径1m～1.2m、深さ75cmを測る。P1・P2間の距離は4mを測る。P3は出入口施設に伴うピットで、径35cm、深さ35cmを測る。その他のピットは確実に本跡に伴うピットであるか疑わしい。床面は平坦で堅緻である。北西壁、南西壁際、カマド前面を除き、広範囲に硬化面が認められた。南東壁張り出し部の形態は不整である。豊溝に沿った部分の床面(?)のレベルは豊溝内床面より、5cm前後高い。覆土は暗褐色土を主体とする。1層はローム粒を多く含む黒褐色土で、表土層の残存である。2～11層はローム粒・塊を含む暗褐色土であるが、3,6,7,8,9層はロームをやや多く、2,11層は多量に含む。また、2層は黒褐色土をブロック状に含む。この黒褐色土は表土に多く含まれている土である。12～15層はローム粒・塊を主とする土層である。11層は砂質粘土粒をやや多く含む。その他、全体に少量の焼土粒と炭化粒が認められた。

遺物の出土量は土器片が約1700点とかなり多いが、土師器杯(2)以外は図示した土器を含め、比較的小型、細片の遺物が多い。2は原図では平面位置が不明だが、高さは計測されており、床面もしくは床面に近いレベルと思われる。また、鉄製品が15点出土し、そのうち、釘が6点(20,21,22,23,25,26)とかなり多いことに注意したい。広範囲に出土する。出土レベルは床面近くから上層まであるが、中位のものが多い。覆土が自然堆積であれば、ある程度堆積した時点で豊穴に入り込んだのであろう。29,30,31は鉄滓である。鉄製品ではその他に刀子や、何等かの器の脚部、紡錘車の柄と思われるものなどが出土した。



第7図 SI 011

#### S I 007・S I 008・S I 009・S I 010・S K 001・S D 001(第6図)

S I 007～S I 010、S K 001・S D 001は調査区西端付近に所在する。土砂の崩落により調査が不可能となり、記録は確認時プランの図面しかとれなかった遺構群である。なお、図面の都合上、S K 001とS D 001もこの項で記述することとする。S I 010とS D 001はA 1・B 1グリッドに、他はB 1グリッドに位置する。S I 007とS I 008は重複関係にあり、S I 007がS I 008を切っている。S I 007とS I 006は至近の位置にあり、同時存在は不可能ではないかと思われる。S I 008とS I 009もかなり近い距離にある。調査区外で重複する可能性もある。規模はS I 007が一辺4m前後、S I 008が5m弱、S I 010が3m強と推測される。S I 007、S I 008、S I 010の3軒は北西壁にカマドを有し、S I 006と近い主軸方位をとる。S I 009は大半が調査区外となるため、規模・主軸方位は不明。

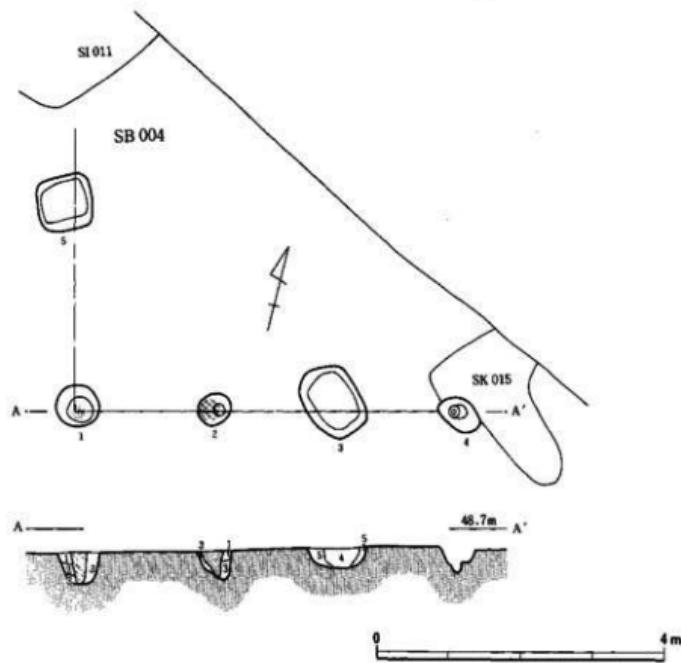
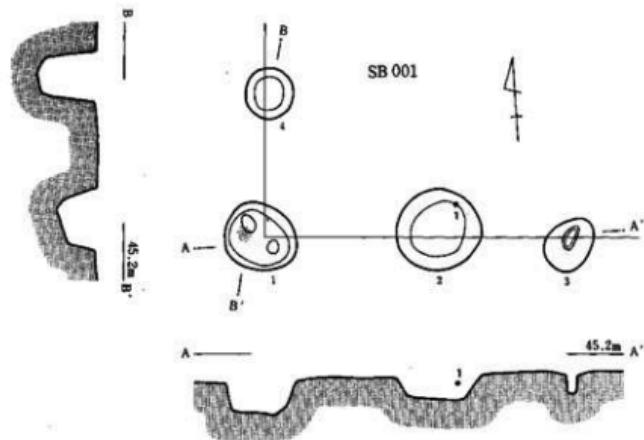
遺物はS I 008とS I 010で土器片が出土した。調査途上であったため、S I 008は21点、S I 010は19点と少量である。S I 008は平安時代、S I 010は古墳時代～平安時代の遺物である。S I 007とS I 009は未掘であり、遺物は出土していない。

S K 001とS D 001は重複関係にあり、S D 001がS K 001を切っている。ともに遺構図面を作成できなかつたが、発掘はかなりのところまで行えた。S D 001は幅約2.5mを測り、S K 001は径2m前後と推測される。

遺物はS K 001では陶器片1点及び北宋銭(33図5)1点が出土した。土器の出土点数はS K 001が108点、S D 001が65点である。ともに9世紀代ぐらいと思われる土器片が多い。周囲に住居が多いため混入したものと思われる。

#### S I 011(第7図 図版5)

調査区中央、F 3グリッドに位置する。調査区内には南壁側およそ3分の1しか入らず、中央及び北壁側の3分の2は調査区外である。そのため、規模や主軸方位に正確な数値を出せないが、主柱穴であるP1・P2間のラインで規模を測ると5.7mとなる。カマドは未検出であり、調査区外となろう。P3は出入口施設に伴うピットであるので、カマドはP3と対向する北壁に位置すると考えられる。そうすると、主軸は北北東を向くことが想定される。P1・P2間のライン及び南壁のラインとP3と直交するラインとで主軸方位を求めるとき、N-27°-E前後となる。確認面から床面まで30cm前後、表土から床面まで約1.1mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、調査部分においては壁溝が全周する。幅は一律ではないが、平均30cm、最も狭い部分で15cmを測る。深さは2～6cmである。主柱穴のP1は径60～70cm、P2は径70cm×1m、深さはともに50cmを測る。P1・P2間の距離は2.9mを測る。P3は径40cm、深さ20cmを測る。床面はP1とP2を囲む範囲は比較的平坦、またやや硬い踏み固められた面が認められたが、明確な範囲確定はできなかつた。その他の部分はやや凹凸が目立つ。覆土は1層が表土、黒褐色土、2層が暗褐色土、3層が茶褐色土、4層が暗黄褐色土、5層は黒褐色土である。2層はローム粒・



第8図 SB 001・004

塊を少量、5層はやや少量、3、4層は多量に含む。

遺物は土器の出土量が約140点、まばらで大半が覆土内の小破片である。図示した個体は8世紀代の偏平な土師器杯であるが、図示しなかった他の破片の中には9世紀代と思われるものも幾つか認められた。

## 2 掘立柱建物

### S B 001(第8図)

調査区西半部中央のD 2 グリッドに位置する。本跡より西、ごく近いところにS 1 003が所在する。また、本跡周囲に幾つかピットがあるが、柱筋が通らない。その中には調査時にS B 002, S B 003, S B 005としたものがあるが、掘立柱建物か明瞭でないため除外し、遺構番号は欠番とした。ただし、調査区外の様相次第では掘立柱建物となるピットがあるかもしれない。その点は本跡より西方のS 1 004～S 1 006周辺のピット群も同様である。本跡自身も掘立柱建物であるか躊躇するものがあるが、可能性がある遺構ということで示しておきたい。掘立柱建物であれば、側柱建物の南西のコーナーを検出したことになる。北側が調査区外であるので、全体の様相は不明である。柱穴のラインはほぼ東西南北に沿うが、東西と南北のどちらが平行でどちらが梁間か不明である。東西2間分、南北1間分を検出した。柱痕跡はコーナーの柱穴で認められた。東西2間分は1～2が広く、2～3が狭いが、4.3m(2.15m等尺)を測る。南北1間は2mである。掘形プランは円形・橢円形を呈し、大きさは径60cm～120cm、深さは30～80cmと不揃いである。

遺物は2で須恵器壺破片(1)が1点出土したのみであった。

### S B 004(第8図 図版6)

調査区ほぼ中央のF 3・G 3 グリッドに位置する。S K 015と重複するが、本跡との新旧関係は不明である。周囲にS 1 011, S D 004、土坑群がある。本跡も掘立柱建物かどうかためらうものがあるが、その可能性がある遺構ということで示したい。S B 001同様、掘立柱建物であれば側柱建物の南西のコーナーを検出したことになる。北東側が調査区外であるので、全体の様相は不明である。東西が梁間かと思われるが、遺存部分が少ないので不明としたい。東西3間分、南北1間分を検出した。柱痕跡は1と2の断面で確認された。柱痕跡部分の土層は黒褐色土で、他の土層と比べ黒色味が強い。東西3間は5.3m(約1.8m等間)、南北1間は2.9mを測る。掘形プランは円形・矩形を呈し、径40cm～100cm、深さは30～45cmを測る。覆土は1層がローム塊主体土、2層はローム塊+黒色土、3層はローム粒をやや多く含む褐色土、4・5層は暗褐色土である。

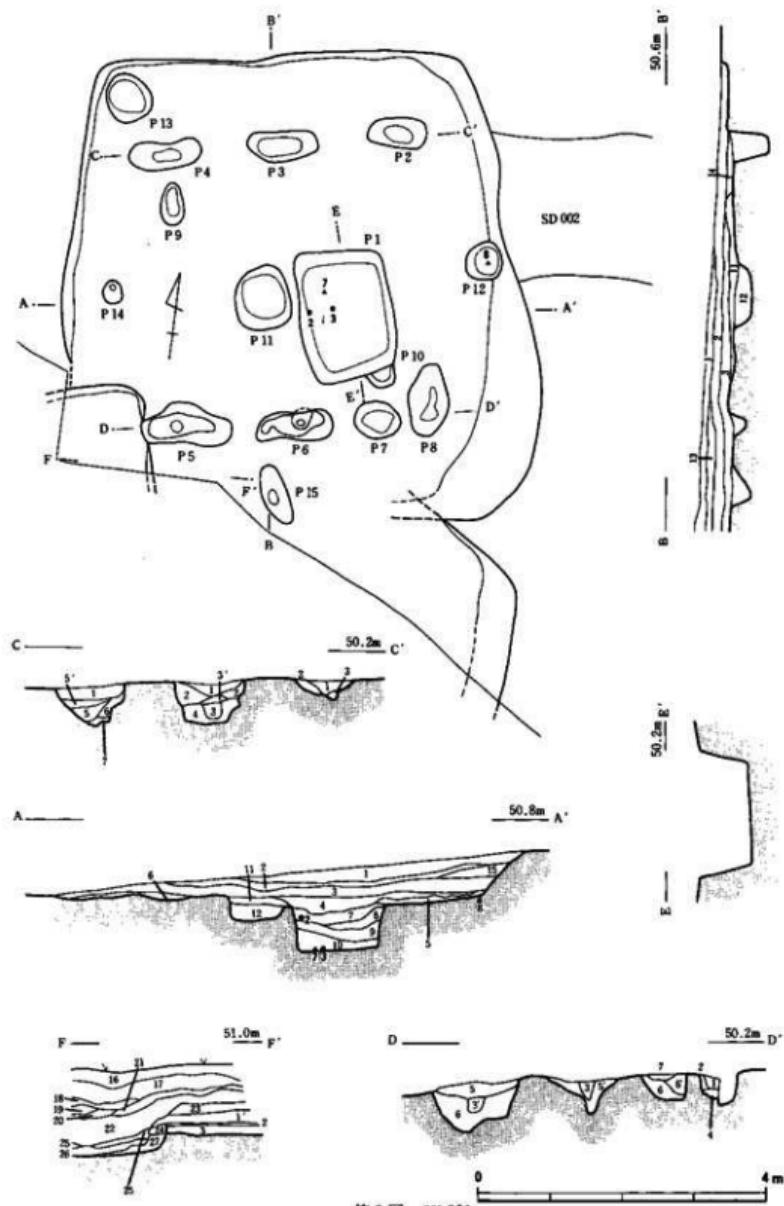
本跡からは遺物の出土が無かった。

### 3 土壙墓・堅穴状遺構

本項では中近世の土壙墓と想定される遺構について記述する。ただし、墓跡であるという根拠に乏しい遺構については板に堅穴状遺構と呼称して記述を進めることにする。

#### S X 001(第9図 図版6)

調査区東半部ほぼ中央のH 4 グリッドに位置する。南方は大豆谷古墳群の所在する台地へと上がっていく。南西隅及び南側に他の堅穴状遺構2基(遺構番号は未付与)と重複する。F-F'により、本跡の方が南西隅の遺構より古いことを確認したが、南側の遺構との関係は不明。またSD 002と重複するが、本跡断面に表れなかったので本跡の方が新しいと思われる。本跡は堅穴内に墓壙(P1)とそれを囲む上部施設を有する土壙墓である。堅穴は台形を呈し、規模は東西5.1~6.5m、南北は正確な数値を出せないが、6.5m前後と推測する。ただし、最も遺存の良い東壁南側の壁を見ると、確認面プランが底面よりかなり広がっており、当初の掘り込みプランはもっと大きいことも考えられる。堅穴はかなり粗雑に掘られている。壁の立上りは東壁南側ではかなり外傾している。底面も凹凸があるが、調査時の所見によれば、ある程度整地している可能性があるようだ。墓壙P1はほぼ長方形を呈し、規模は堅穴底面で1.7m×1.3m、墓壙底面で1.4m×1.1m、深さ60~75cmを測り、整然と四角く掘り込まれている。本跡の主軸を墓壙P1の長軸で求めると、N-16°-Wとなる。内部に人骨は遺存しなかった。堅穴底面において墓壙P1を方形に囲む形でピットが確認された。P2・P3・P4・P5・P6・P8は堅穴内で規則的に配され、柱穴と思われる。その構成する平面はやや南北に長い方形を呈し、南北約3.8m、東西約3.4mの空間を形成する。いずれのピットも長辺円形を呈し、長さ1m前後、幅40cm前後を測るものが多い。深さはピットによって区々であり、30~70cmを測る。ピット長軸の断面は擂鉢状を呈し、中央が最も深い。P8は長軸を南北にとるが、他のピットは東西にとる。その他のピットではP7、P9は各々、P6・P8間、P4・P5間にあり、柱穴の可能性がある。補助柱穴であろうか。P9は深さ12cmと浅い。また、P2・P8間、P4・P5間にもやや浅く窪んだ箇所が認められ、P9以外にも柱穴があった可能性がある。P8・P9が長軸を南北にとることも間に柱があることを示唆していると思われる。ただし柱があったとしても地中部分は浅く、補助的な役割ではないだろうか。その他のピットはP15が形態から柱穴と思われるが、本跡に伴うピットか判然としない。P15以外は性格不明だが、P10は底面近くから焼土粒を含む灰層が検出された。深さはP10が20cm、P12が25cm、P13が30cm、P14が20cm、P15が40cm。覆土は堅穴、P1、P11(A-A'、B-B'、F-F')とP2~P8(C-C'、D-D')とで分けて記述する。堅穴内の覆土は3層がローム粒・塊主体土、1,2,4,5,6,13,14,15層は黒褐色土とローム粒・塊の混合土層であるが、特に1,4,5,6層はロームを多く含みローム塊が目立つ。2層はロームがやや少なく灰色味を帯びる。P1覆土の7層はローム粒・塊を含む茶褐色土、8層は暗褐色土+黑色土粒、9層は暗褐色土+ローム粒・塊、10層はローム塊を含む灰褐色土。P11を覆う11・12層は7層と近似す



第9図 SX 001

る土層である。12層の方が暗い。以上の土層のうち少なくとも3層以下は人為的に埋め戻された土層と考えられる。F-F'では1'層と25層についてのみ述べたい。25層は宝永火山灰が良好に堆積しており、また1'層は1層類似の層であるが、これも宝永火山灰を粒状に含んでいる。これにより本跡の埋め戻しが行われた後、宝永の火山灰層が堆積したことが分かる。従って本跡の下限年代を18世紀初頭と押さえることができる。P2-P8の覆土は1,1'層が暗褐色土、2,3,3',5,5'層は黒褐色土である。2層はロームの含有がやや多く、3'層は少ない。4,6,7層はローム粒・塊を主とする層で、4層はローム塊多く、7層は少ない。

遺物はP1底面から土師質土器皿(3)、石硯転用砥石片(7)が出土した。また、墓壙覆土上層から土師質土器皿(2)が出土した。このうち3は完形、正位の状態で出土し、供獻品と考えられる。7は底面の出土であり、2は浮いているが、覆土は埋め戻されているので、ともに供獻品となるかもしれない。また、P12内からは底面より10cm浮いて石臼転用砥石(8)が出土した。上記以外の遺物は約140点出土したが、数点を除き奈良・平安時代の土師器・須恵器である。

#### S X 002(第10図 図版6)

調査区東半部ほぼ中央のH 4 グリッドに位置する。S X 001同様竪穴内に墓壙と柱を有する土壙墓と思われるが、整然としていない。壁の状態からここに竪穴があったと思われるが、遺存が悪く底面まで浅いことと確認面で土層の攢乱があるため、プランはあまり明瞭でない。特に北西側の立ち上がりが不明瞭である。南側はS D 003と重複する。新旧関係は不明。西側ではS E 001と重複する。本跡の方が古い。平面形は不明部分が多いが不整の橢円形か。規模は正確な数値を出せないが、およそ9.5m×6.5mと推測する。底面は東側で壁溝状の凹みがある。また多数のビットを確認したが、底面の凹凸が著しいので把握できなかったビットがあるかもしれない。確認したビットはいずれも墓壙と決定できる遺物は出土しなかつたが、P1は平面規模・深さ・覆土の状態より、墓壙と考えられる。竪穴底面での規模は1.4×1m、墓壙底面は75~85cm、深さ80cm~100cm。P3,P4は平面形態・規模から墓壙の可能性があるかと思われるが、深さが各々15cm、25cmと浅いのが気にかかる。その点P2aは深さ70cm、P9bは85cmを測る。P2b~P2d,P5,P6は平面形が長楕円形でS X 001の墓壙を囲むビットと類似し、柱穴と思われる。ただしS X 001と異なり、規則的な位置関係ではない。P2c,P2d,P5,P6の断面は一方が階段状に段を成して立ち上がり、他方は鋭利な鉄器で掘削した感じで立ち上がる。中央の一一番深い部分に柱を立てたと思われる。P8も形態は長楕円形を呈するが、bは10cmと浅い。aは深さ30cm。その他のビットは図面で計測できるビットを除いて深さのみ記す。P2bは85cm,P9aは45cm,P10は25cm,P12は60cm,P13は20cm,P14は15cm。竪穴の覆土(B-B')は1層がローム塊主体土、2層以下は暗褐色土とローム粒・塊の混合土層であるが、2,4,5層は多量にロームを含む。以上の様相から本跡も埋め戻されていると思われる。P1の覆土(D-D')は1,3,5,7,9層がローム粒・塊主体土、2,4,6,8層はロームを含む暗褐色土、10層は暗黄褐色土、11層は暗茶褐色土。11層



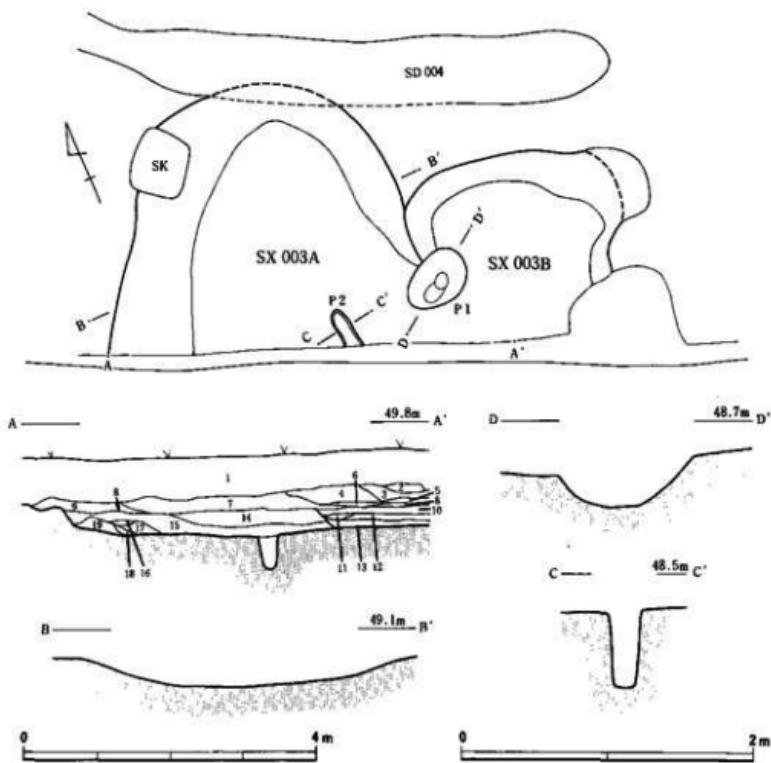
第10図 SX 002

はローム塊が少ない。9層から1層までロームと暗褐色土が互層となっており、単なる埋め戻しではなく、意図的な土の選択が行われたことが分かる。P2の覆土（C-C'）は1,2層が暗褐色土で1層はやや少量、2層は多量のローム粒・塊を含む。3,4,5層は多量のローム粒・塊を含む暗黄褐色土だが、4層はややロームが少なく、5層はローム塊目立つ。

遺物は覆土中から土器片が約600点出土したが、土師質土器、磁器小皿(5)など十数点を除けば、平安時代の土器類・須恵器である。その他鉄釘(1)等の鉄製品や砥石が出土した。

#### S X003A・S X003B(第11図 図版7)

調査区中央やや東寄りのG 4 グリッドに位置する。2基の竪穴状遺構が重複していると思われる。西側をS X003A、東側をS X003Bとして一括して記述する。土層断面の観察によれば、Bの方がAより新しい。AはSD004と重複する。Aの方が古い。北方、S X004との間は土坑群の密集地域である。A・Bとも土坑と重複するが新旧は不明。平面形は不整な形態で、南側

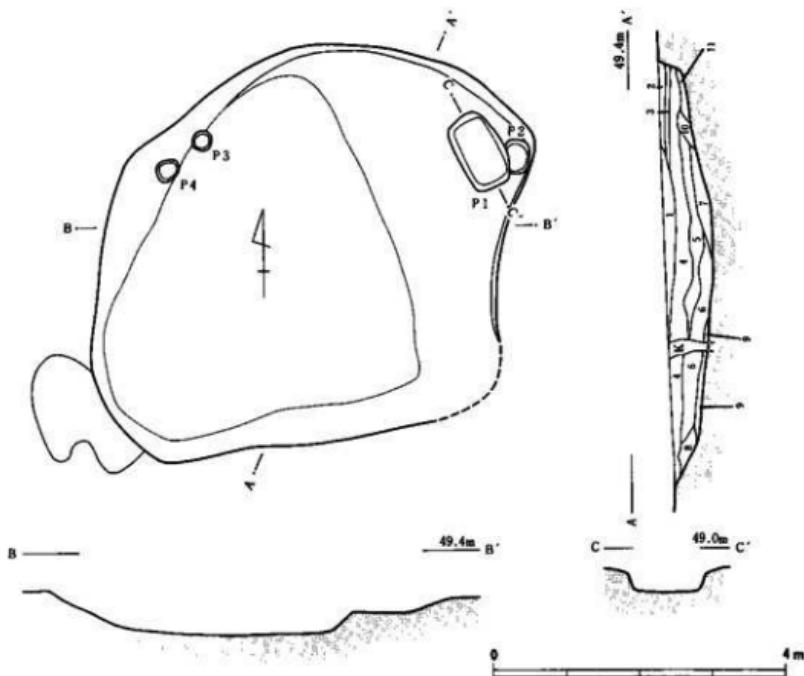


第11図 SX 003A・SX 003B

は調査区外となるため規模は不明。底面は細かい凹凸があり、調査区外に向かって緩く傾斜する。壁の立ち上がりも共に緩やかである。AとBの間にP1があるが、伴うかどうか不明。径は70cm~100cm、深さ30cm前後を測る。Aの底面ではP2を検出した。南側が調査区外に入るが、長楕円形を呈すると思われる。幅20cm、深さ50cmを測る。底面は平坦である。覆土は2,3,6,9,10,12,19層はローム粒・塊をあまり含まない暗・黒褐色土で、特にB側の覆土は黒色味が強い。4,5,7,11,13,14,15,17,18層はローム粒・塊を含む暗・黄褐色土で、特に15,18層はロームを多く含む。8,16層はローム粒・塊主体土である。A、Bとも埋め戻されていると思われる。遺物は覆土中から約110点出土した。数点を除いて平安時代の土師器・須恵器である。AとBで特に差異はない。中近世遺物は出土しなかった。

#### S X 004(第12図 図版7)

調査区中央やや東寄りのG 3・G 4 グリッドに位置する。本跡南西で土坑と重複する。新旧不明。また南方は土坑群の密集地域である。東にやや離れて S X 007がある。本跡は不整楕円形を呈する堅穴状遺構である。平面規模は最大値で約7mを測る。堅穴は極めて粗雑に掘られ、



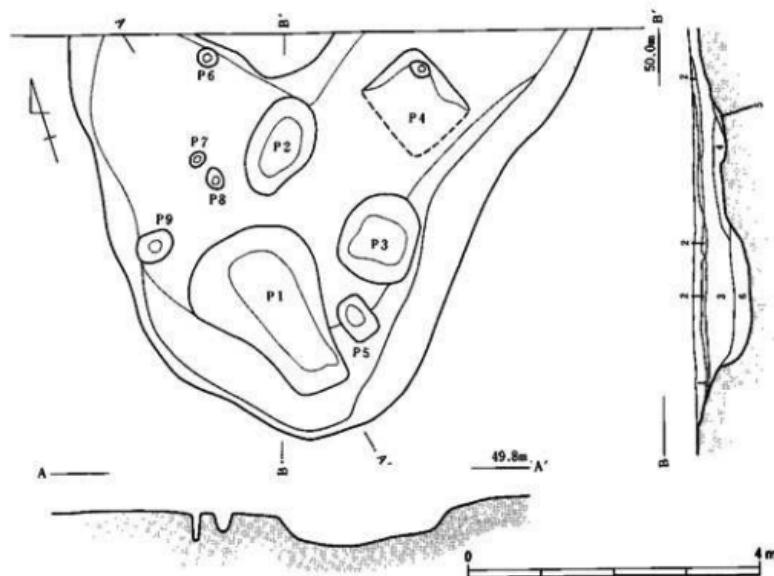
第12図 SX 004

底面は北東半部で段状になっているが、整った様相ではない。壁の立ち上がりは全体的には緩やかで、浅手の壠鉢状に掘り込まれている。竪穴内では本跡に伴うかどうかの判断は微妙であるが、長方形プランを有するピット(P1)が検出された。P1は規模 $110 \times 65\text{cm}$ 、深さは $20\text{cm}$ を測り、底面は比較的平坦である。また、竪穴の底面に沿うように2本の柱穴跡と思われるピット(P3, P4)を検出した。P3, P4は確認面での掘り込みはほとんど無く、柱の当たり痕跡のみである。本跡に伴うか不明。P2はわずかな凹みである。性格不明。竪穴覆土は1, 2, 3, 4, 6, 9, 11層がローム粒・塊を含む暗・黒褐色土である。2層はロームやや少なく、3層は灰色味を帯び、堅緻である。5, 7, 8層はローム粒・塊を多く含む茶褐色土、10層はローム塊主体土である。

本跡では遺物は出土しなかった。

#### S X 005(第13図 図版7)

調査区東半部ほぼ中央のH 4 グリッドに位置する。重複遺構はないが、南西にやや離れてS X 002がある。北側は調査区外となる。本跡は不整規円形を呈すると思われる竪穴状遺構である。竪穴内からは多数のピットが検出された。本跡からは土壤墓と決定できる遺物は出土しなかつたが、検出されたピットのうちP1～P4は規模から墓壙となる可能性もあろうかと考えられる。P4は遺存が良くないが、長方形を呈すると思われる。規模はP1が $2.5 \times 0.8 \sim 1.8\text{m}$ 、P2が $1.40$



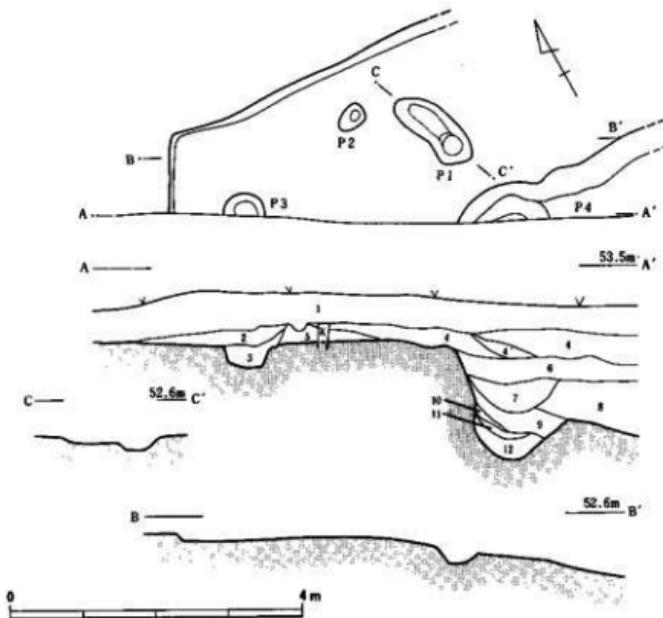
第13図 SX 005

×85cm、P3が $1 \times 1.2$ m、P4が推定 $1 \times 1.2$ m、深さはP1が30~40cm、P2が15cm、P3が10~30cm、P4は遺存が悪く10cm以下である。P4内にピットがあり、深さ15cmを測る。他の小ピットはあるいは柱穴の想定が可能かと思われるが、S X 001で検出したような長椭円形プランではない。深さのみ記すとP5は15cm、P6も15cm、P7は40cm、P8は30cm、P9は20cmである。堅穴の底面は凹凸が著しく、P2の北側では一段の高まりが認められた。これは調査区外へと続く。壁も底面からいったん垂直気味に立ち上がるが、そこから傾斜を緩めテラス状の壁面となる。覆土は1.3、4.5、6層はローム粒・塊を多量に含む暗褐色土である。4.5層は黄色味、6層は黒色味強い。3層は焼土塊を含む。2層は灰褐色粘質土で特異な層である。ロームはやや少ない。本跡の覆土は堅穴内を一度に埋め戻したものと思われる。

遺物は土器片は覆土中から約650点出土した。中近世遺物は擂鉢片(2)の他、十数点である。それ以外の遺物は奈良・平安時代の土師器・須恵器である。その他鉄製品が数点出土した。

#### S X 006(第14図 図版 8)

調査区東端の15グリッドに位置する。本跡東方は下って行き、逆に南方は大豆谷古墳群の所在する台地へ上がって行く。S F 002と重複する。本跡の方が古い。本跡は東側の壁の立ち上がりを検出できず、また、南側は調査区外となるため全体の様相が不明瞭であるが、不整な形態を呈する堅穴状遺構である。調査区外の壁に接してかなりの深さの落ち込み(P4)がある



第14図 SX 006

が、他と一体の遺構であるか調査区内だけでは決し難い。この部分を除いた竪穴は概して浅く遺存は良くない。底面は細かい凹凸があり、東側に向かってやや傾斜する。P1は深いが長楕円形プランである。P2、P3は性格不明。P2の深さ20cm。P4の性格も不明であるが、墓壙か他の竪穴状遺構である可能性が考えられる。底面は平坦ではない。覆土のうち、11層は宝永火山灰層である。これにより少なくともP4は18世紀初頭を下らないことが分かる。2,4,4',6,7,8,9,12層は暗褐色土で、2,6,8,12層はローム粒・塊が少ない。8,9層は黒色味強く、12層は弱い。3,5層はローム塊をやや多く含む暗褐色土、10層はローム塊主体の土層である。本跡の覆土は埋め戻されているか判然としない。P4の上部はロームが少なく、自然堆積のようにも思える。

遺物は土器片が約30点出土した。数点を除いて平安時代の土師器・須恵器である。

#### S X 007(第15図 図版8)

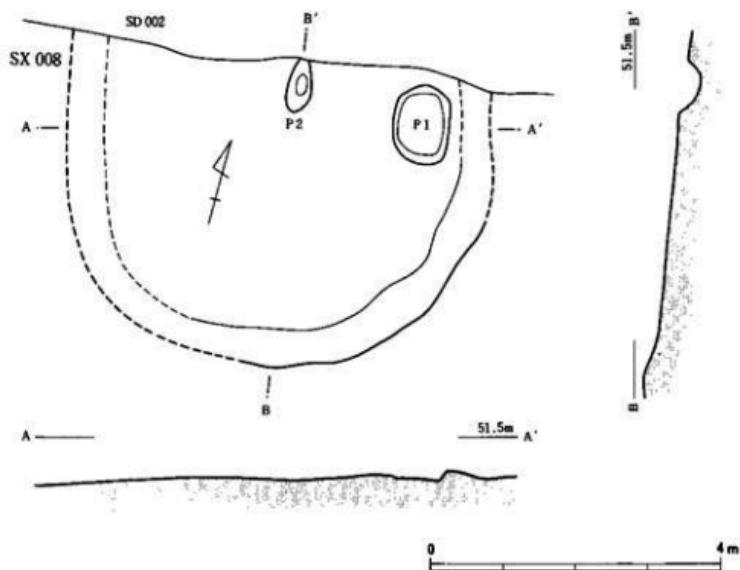
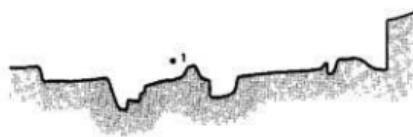
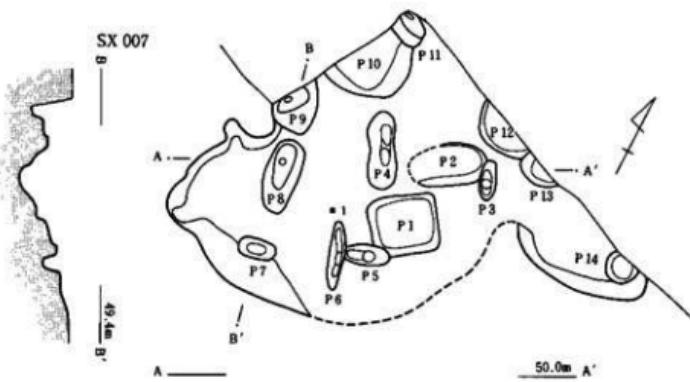
調査区東半部ほぼ中央のH 3・H 4グリッドに位置する。竪穴内に長楕円形のピットが幾つかあることから土壙墓と考えられる。確認面の形態から土壙墓が2基重複しているようにも思われるが、竪穴内のピットの位置や、プランが不整なこと、また、確認面で遺構の底面に近くプランが不明瞭であることからひとまず一つの遺構と考えておきたい。底面は凹凸が著しく、平坦面はあまり見られない。壁の立ち上がりは遺存している部分は緩やかである。底面では多くのピットを検出した。そのうちP3,P4,P5,P6,P7,P8,P9,P11は長楕円形プランを呈し、柱穴と思われる。P9,P11は明瞭でなかったが、他は柱の当たり痕が認められた。また、P3,P4,P6,P8は長軸が南北方向を、P5,P7は東西方向を向く。このような柱穴の関係はS X 001と同様である。S X 001のように規則的な配列ではないが、何らかの上部施設があったことは確かであろう。墓壙と指摘できるピットは明確でないが、P1は長方形プランを有し、可能性があるものと思われる。底面での規模は80×60cmを測る。その他P2,P10,P12なども墓壙となる可能性があるかもしれないが、明確な根拠に欠ける。本跡の覆土はローム塊を多量に含む土層を主体とした単一な様相である。意図的に埋め戻されたものと思われる。

遺物は本跡からは永樂通宝(1)が1点、覆土中から出土したのみである。

#### S X 008(第15図)

調査区東寄りのH 4・I 4グリッドに位置する竪穴状遺構である。S D 002と重複するが、本跡との新旧関係は不明である。遺存状態は極めて悪く、南東側で壁の一部を認めたのみである。底面は凹凸が少なく、全体にS D 002に向かってなだらかに傾斜している。また、本跡の位置する場所は西側に向かって緩く下っており、本跡はその緩斜面を掘り込んで作られている。内部では北東隅の方に楕円形プランを呈するピット(P1)が検出された。遺存する深さは約10cmである。墓壙であったかどうか不明。また、S D 002と重複する中央部において長楕円形を呈する柱穴らしきピット(P2)を一箇所検出した。

遺物は奈良・平安時代の土師器・須恵器十数点の他、かわらけ(1)が1点出土した。



第15図 SX 007・008

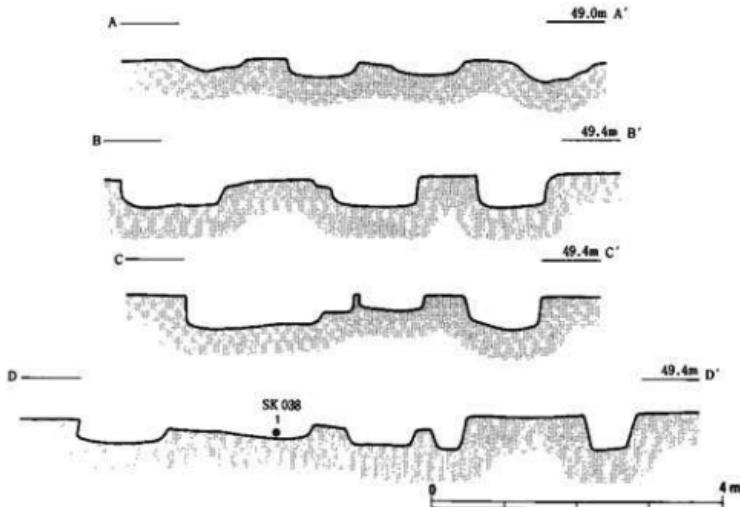
#### 4 土坑・地下式土壙

調査区内においては多数の小規模な土坑が検出された。これらの土坑については、便宜的に調査区東半部に群在する土坑を土坑群1、調査区西部に分布する土坑を土坑群2と呼称してまとめて記述する。なお、調査時点では土坑群1の土坑の大多数に遺構番号を付けたが、幾つかの土坑についてのみ明示し、他は省略する。なお、SK 001は竪穴住居の項で説明した。

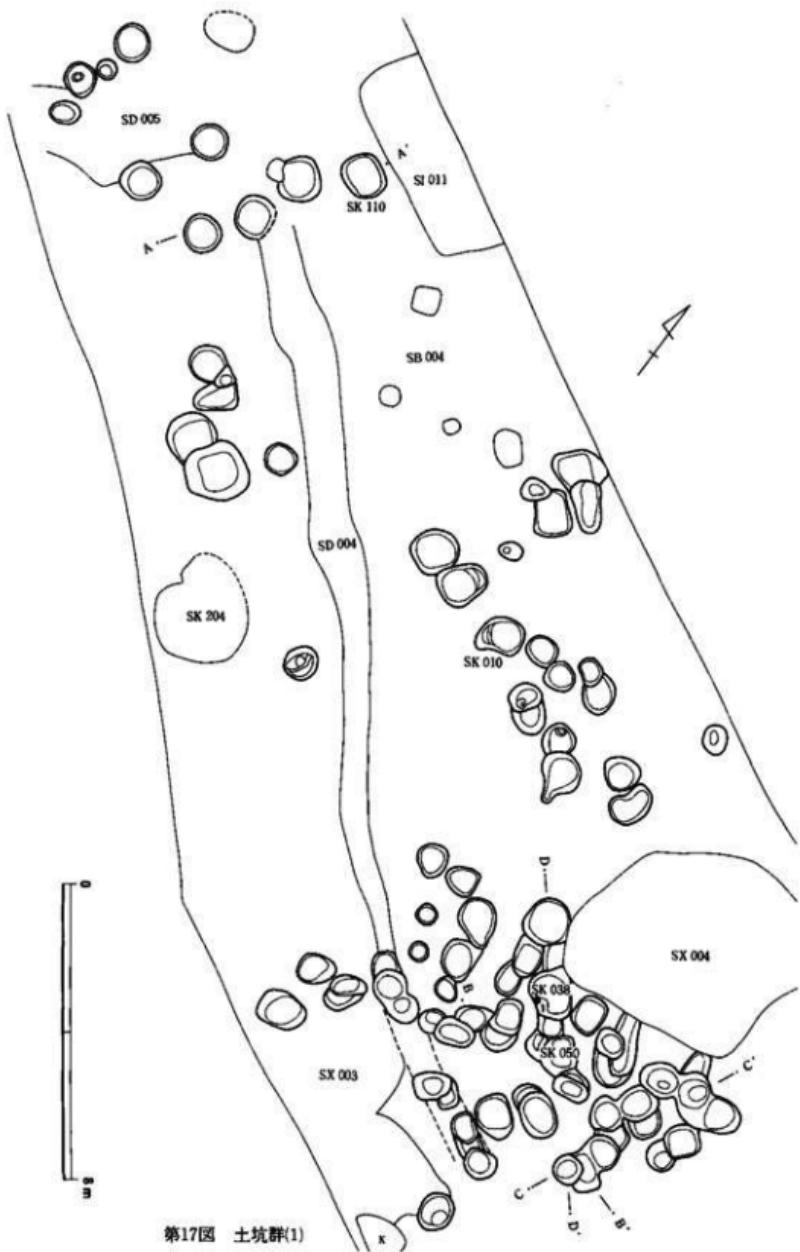
##### 土坑群1(第16・17図 図版9)

調査区中央から東よりのF 3・G 3・G 4グリッドに所在する約90基の土坑群で、比較的密に分布する。特にSX 003とSX 004の間は濃密な分布を示す。平面形は不整な橢円形、円形、長方形など多様な形態を呈し、規模も大小様々であるが1m前後を測るものが多い。確認面から底面までの深さは一定していないが、概して浅い土坑が多い。しかし、表土が厚いので本来はもっと深さがあったと考えるべきであろう。底面には柱の当たりは見受けられない。覆土はロームを含む暗褐色土、黒褐色土を基調とする土坑が多いが、幾つかの土坑はロームを多量に含み、埋め戻された様相が窺える。また焼土を含む土坑も認められた(SK 010)。

遺物はSK 038覆土中から炭化米(図版17-3)が出土した。またSK 050から先土器時代のナイフ形石器(30図2)が、SK 110から縄文時代の磨石(30図3)が出土したが、伴うものとは思われない。その他の遺物は計29の土坑から合わせて約400点の土器片が出土したが、数点を除き、奈良・平安時代の土師器・須恵器である。土坑の性格は規模や周囲の状況から土壙墓かと思われるが、明確な根拠に欠ける。



第16図 土坑群(1)断面



第17図 土坑群(1)

## 土坑群2（第18図 図版9）

調査区西半部のC1・C2・D2グリッドに所在する土坑群で、S1003～005の周辺及び重複して分布する。分布は比較的疎で21基を数える。これらの土坑の中には調査時に掘立柱建物SB002,003,005として調査したものも含む。平面形は梢円形・円形を呈し、規模は小は径50cm前後、大は80cm前後を測る。土坑群1と比べると小振りである。確認面からの深さも15～75cmまであるが、40cm前後が最も多い。断面A-A'の2基の土坑は土層断面の観察では柱痕があり、調査区外の様相次第では掘立柱建物になる可能性が十分である。他の土坑も掘立柱建物の柱穴となるものがあるかもしれないが、調査区内の様相だけでは判然としない。

遺物はSK205から須恵器片が1点（26図）出土したが、他の土坑からは出土しなかった。なお、SK205は調査時にSB002として調査したピットのうちの一つを改称したものである。

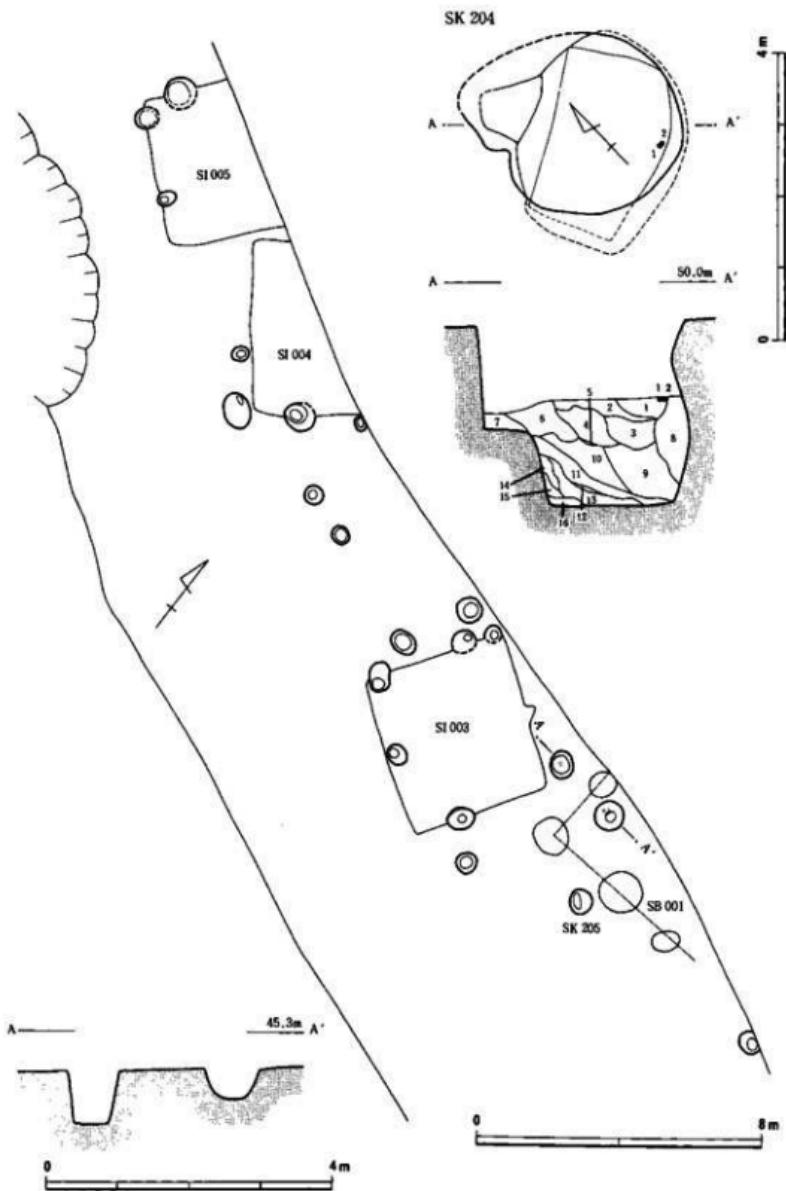
## SK204（第18図 図版10）

調査区中央やや東寄りのF4・G4グリッドに位置する。周囲に土坑群とSD004がある。本跡は発掘前に井戸跡と考えSE002と付けたが、地下式土壙であることが判明したため、SK204と付け換えた。遺物注記は旧番号のままである。本跡の南西方はすぐ開析谷に下る斜面となるが、本跡自体は平坦地に立地する。堅壙と地下室の間に段差があり、半田堅三氏分類の有段Ⅰ類に属する。天井部は調査前に崩落しており、細かい型式は不明瞭であるが、堅壙が最も短いDに該当すると思われる。堅壙の近くには基準杭があり、それを保護するために一部を発掘しなかった。堅壙のプランは不整であるが、底面の形態から円ではなく方形を意識していると思われる。規模は底面で長さ70cm、幅は最大1m、確認面からの深さは1.45mを測る。底面は地下室に向かってやや傾斜する。地下室の平面形は堅壙に対して横長の不整長方形で、規模は底面で長軸2.5m、短軸1.3～1.6mを測る。堅壙底面から地下室底面までの深さは1.1mを測る。階段等の施設は無く、立上がりは急である。地下室底面はほぼ平坦である。覆土断面図は深さがあるため上部と下部に分けて作成したが、整合しなかったので上部は省略した。1,3,9,12,15層がローム塊を主体とする層、他の層はローム粒・塊を含む暗褐色土・暗黄褐色土である。2,4,5,7,8,10,13層はロームを多く、6,11,16層はやや多く、14層は少量含む。また、2,3,4層は少量の貝殻を含む。覆土断面を観察すると10層以下の土層は堅壙から入り込んだ土が徐々に堆積したものと思われる。そして10層が堆積している時に天井部の崩落が起こり、9,3層等、ローム塊を多く含む層が堆積したのであろう。上部は全体に黒味強く、表土の崩落層及びその後に堆積したローム混じりの暗褐色土を主体とする。

遺物は覆土中位から擂鉢(1)・こね鉢(2)が出土したが、中・近世遺物は他に6,7点認められる。また、奈良・平安時代の土師器・須恵器細片が約60点出土した。

註

1. 半田堅三「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良』2 1979



第18図 土坑群(2)・SK 204

### S K 201(第19図)

調査区東端のI 4 グリッドに位置する性格不明の土坑である。本跡のすぐ南にはS K 202がある。形態は不整の長方形で、 $2.45 \times 1.6$ mを測る。確認面から底面までは10~20cmと浅く、遺構上部の遺存は良くない。底面は壁際がやや高いが比較的なだらかである。硬化面は認められない。壁の立上がりは緩やかである。覆土はいずれも暗黄褐色土で砂質である。2層はローム塊を少量、3層は淡黄褐色砂質土を多量に含み、ざらざらとした質感である。なお、S K 201~S K 203付近の地山層は淡黄褐色の砂質土層である。遺物は概かと思われる土器片(1)と古瓦片1点(2)を含め、約30点出土したが、全て小破片である。2,3土師質土器と思われる土器片があるが、他は古墳時代~平安時代の土師器・須恵器である。本跡に確実に伴う遺物は見当たらない。

### S K 202(第19図)

調査区東端のI 5 グリッドに位置する性格不明の土坑である。近接するS K 201と近似の形態・規模であり、両者が同様の性格であった可能性が考えられよう。形態は隅丸の長方形で、 $2.5 \times 1.7$ mを測る。確認面から底面までは10~30cmと浅く、遺構上部の遺存は良くない。底面は平坦で、硬化面は認められない。また、高さはS K 201より僅かに高い程度で、差は少ない。壁の立上がりもかなり外傾する。遺物は約20点で、少量細片である。現代に近い時代の瓦片1点を除き、奈良・平安時代の土師器・須恵器である。

### S K 203(第19図)

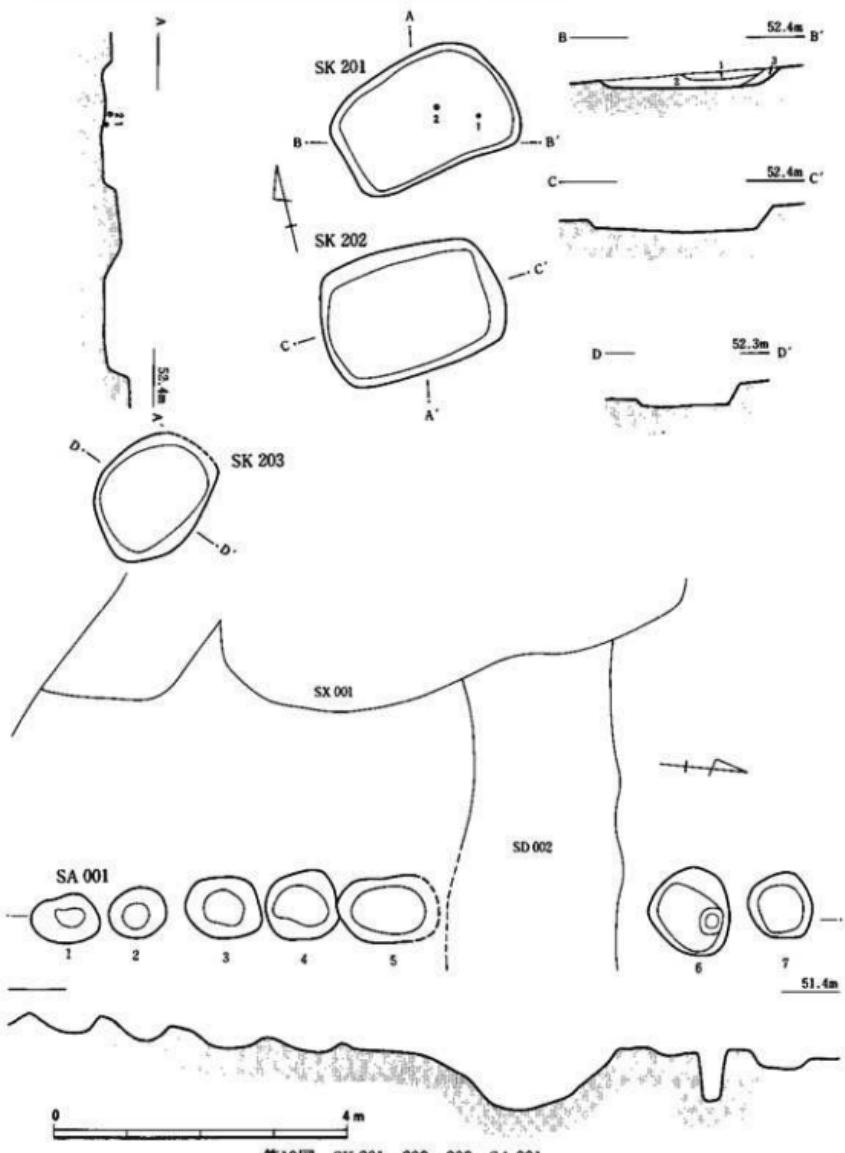
調査区東端のI 5 グリッド、S K 202の西方2mに位置する。性格不明の土坑である。形態は不整の楕円形で、径 $1.8 \times 1.4$ mを測る。確認面から底面までの深さは10~25cmと浅く、遺構上部の遺存は良くない。底面は平坦で、硬化面は認められない。遺物は出土しなかった。

## 5 棚列

### S A 001(第19図 図版8)

調査区東よりH 4・H 5 グリッドに位置する。S D 002と重複するが、S D 002を掘り込んでしまったため新旧関係は不明である。東にS X 008が、西に2m離れてS X 001がある。北から南へ計7基の柱穴を確認したが、S D 002と重複する部分には2基ないし3基の柱穴があったと考えられる。柱穴列の北はまだ調査区内であるが、確認できなかった。しかし、確認面の層序に乱れがあることから無かったとは言い切れない。南は調査区外に続くと思われる。柱穴はほぼ一直線に並び、主軸方位はN-6°-Wである。この数値はS X 001に比較的近い。長さは両端の1と7の柱穴中央で計測すると9.8mを測る。形態は不整の円形、楕円形で、径は70~140cmを測る。深さは10~25cmと浅く、遺構上部の遺存は良くない。6内に深さ60cmのビットがあるが、他の柱穴の状況を見ると、本跡に伴うかどうか疑問である。底面の広い柱穴が多く、

柱の立っていた位置を確定できないが、柱間は平均2.8mと推測する。出土遺物は全て平安時代の土師器・須恵器片で、各柱穴合わせて13点と少量である。



第19図 SK 201・202・203・SA 001

## 6 井戸

### S E 001(第20図 図版10)

調査区やや東寄りのG 4・H 4 グリッドに位置する。S X 002, S D 003と重複し、S X 002より新しいがS D 003との関係は不明。本跡の北側の基準杭を保護するため一部未発掘。また内部も安全上中途で発掘を中止した。平面形は梢円形と思われる。南東部が広がるがS D 003の影響及び壁の崩壊であろう。確認面での径2.3m、深さは1.7mまで発掘したが、その下はボーリング棒で底面に達しなかったので2.7m以上はであることになる。断面を見ると確認面から1.4~1.5mのところに段があり、その下が水溜になるとと思われる。井戸側には板材等の痕跡はなく、素掘りの井戸と考えられる。覆土は1,3,5,7,8層がロームを含む暗黄褐色土層であるが、1,3層はソフトロームが、5,7層は立川ローム中層の土が、8層は下層の土が多い。2,4,6層は暗・黒褐色土層である。遺物は平安時代の須恵器・土師器片が16点出土した。

### S E 003(第20図)

調査区中央F 3 グリッドに位置する。かなりの深さがあると思われるため確認面から1.8mで発掘を中止した。また調査区中央を通る道路に近いため北西側を発掘しなかった。平面形は円形ないし梢円形と思われる。径は1.4mを測る。壁は垂直的である。覆土は2層は小ローム塊を、6,8層は大きめのローム塊を主とする。1,3,4,7,9層は暗褐色土で、7層は多量のローム塊を含むが、他は壁際を除きロームは少量である。4層は褐色味強い。5層は少量のロームを含む黒色土である。6~8層のロームは壁の崩落であろう。出土遺物なし。

## 7 道路状遺構

### S F 001(第20図 図版10)

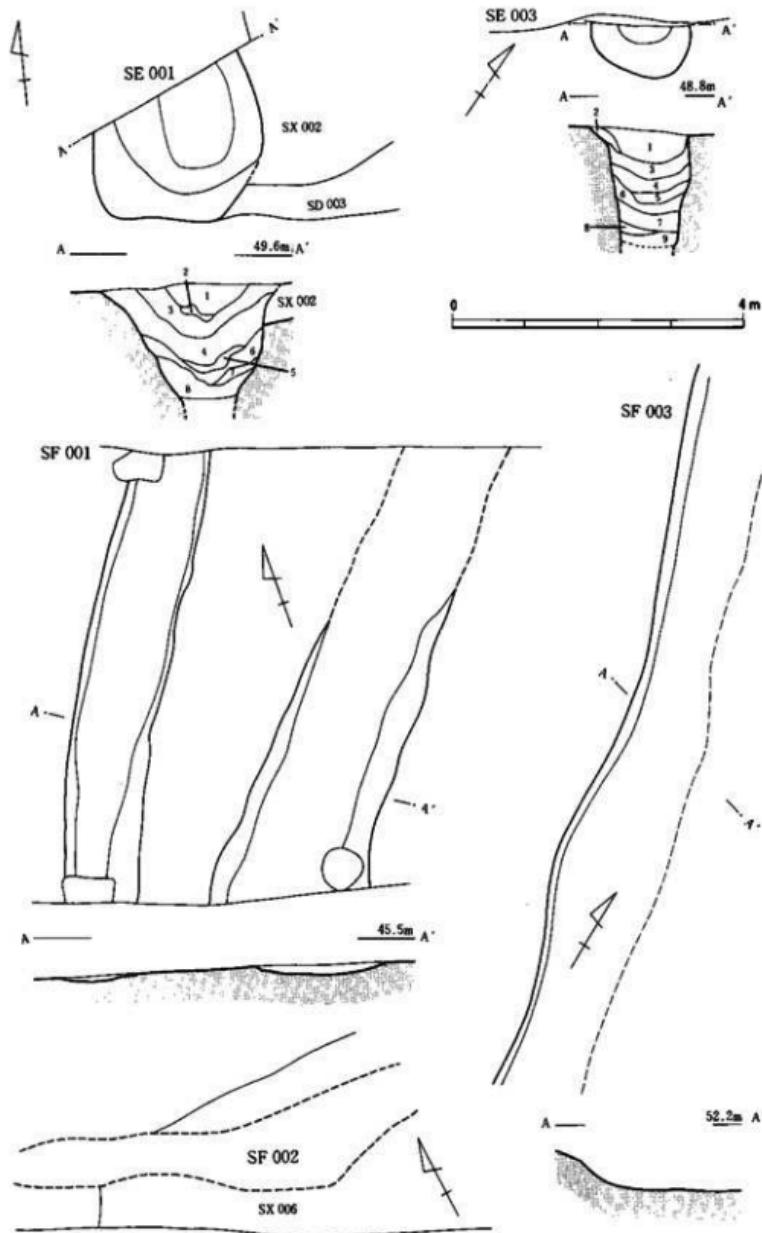
調査区やや西寄りのD 2 グリッドに位置する。北東-南西方向に延びる2条の溝状遺構の底面に硬化面が認められることから道路状遺構と判断した。なお遺構南側は斜面に近く安全上未発掘である。確認面での幅は4.3~4.8mで、2条の硬化面の間は1~2mを測る。この部分も比較的堅硬であるが2条の硬化面よりは軟質である。2条の硬化面の方向はやや異なり、方位は北から東に30~40°振れる。また南西に向かって台地が傾斜しているためか、2条の硬化面の凹みも南西に向かって深くなる。遺物は平安時代の土師器・須恵器片が約30点出土した。

### S F 002(第20図)

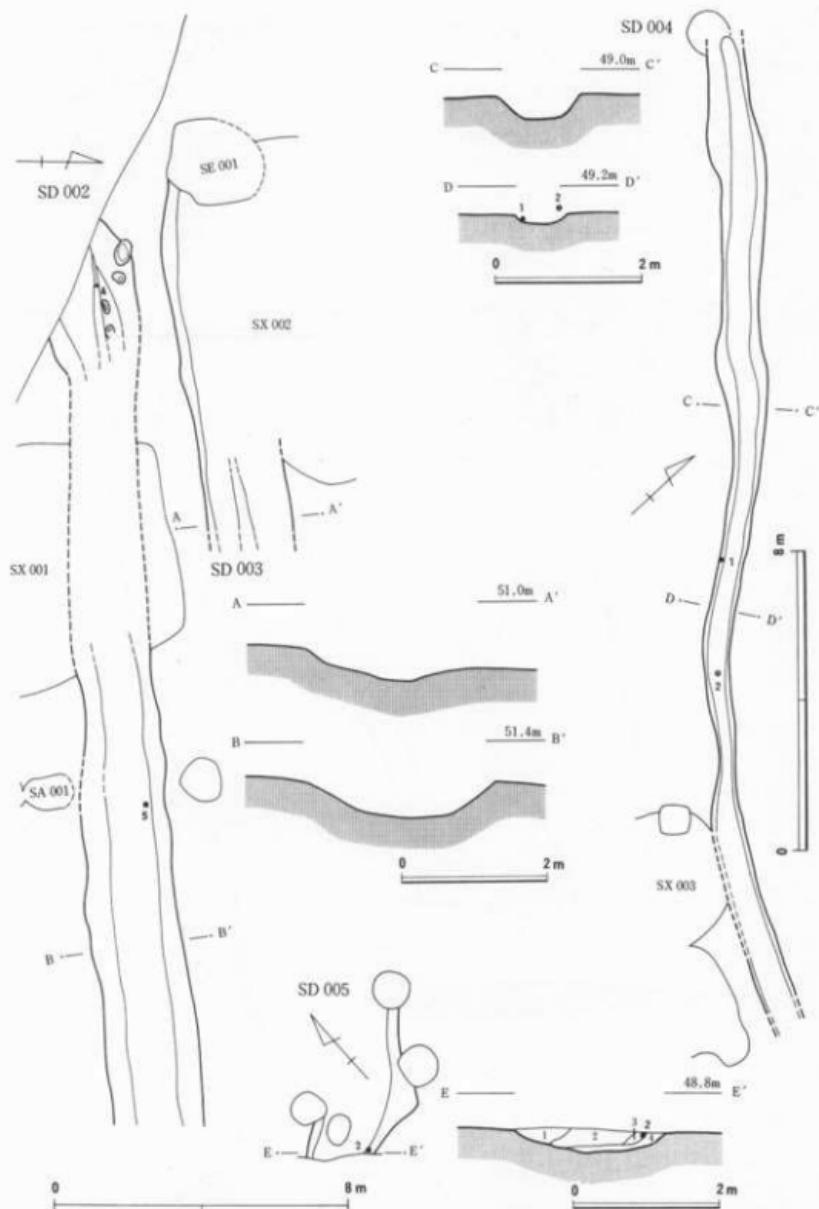
調査区東端 I 5 グリッドに位置する。S X 006の調査時に確認された硬化面の帶で、S X 006の底面及び遺構外西方に跨がり、東西方向に延びている。確認全長は5.5mで、その東西は判然としない。幅は0.5~1.2m。S F 003と繋がる可能性がある。出土遺物なし。

### S F 003(第20図)

調査区東端 I 4・I 5 グリッドに位置する。東に下る緩斜面の肩を等高線に沿ってカットし



第20図 SE 001・003・SF 001・002・003



第21図 SD 002・003・004・005

て造り出された遺構で、南北に延びる。方位はN-16°-W。確認全長は10.3m。その南北は判然としない。幅は1.0~1.5m以上であろう。底面は凹凸が認められた。出土遺物なし。

## 8 溝状遺構

S D 001は堅穴住居の項で説明した。

### S D 002(第21図 図版10)

調査区東寄りのH 4・I 4グリッドに位置し、直線的である。N-84°-Eとほぼ、東西に方位をとる。S X 001, S A 001と重複し、S X 001との新旧関係は本跡の方が古いと思われるがS A 001とは不明。なお時間の制約があって東側は未発掘。発掘全長は24.8mで西側は調査区外へ続く。幅は2.0~2.6m、深さは平均50~60cm、最深で80cm。断面は緩やかな逆台形で、底面が広い。覆土断面は図示しなかったが、中下層がロームを含む暗褐色土であるのに対して、最上層はローム塊を主体とする層であり、最上層は埋め戻された層である。遺物は土器類が約330点出土したが、2,3の中近世遺物を除きほとんどが平安時代の須恵器・土師器である。また灰釉陶器片が2点出土した。その他用途不明の鉄製品(5)と刀子、砥石片が出土した。

### S D 003(第21図 図版9)

調査区東寄りH 4グリッドに位置する。S D 002の北1~2m離れてほぼ並行する遺構であるが時間の制約のため一部のみの発掘であり、全体の様相は不明な点が多い。S X 002と重複するが新旧関係不明。確認面での幅2.4m、底面1m、深さ40cmを測る。遺物は平安時代の須恵器・土師器・灰釉陶器片が約20点出土した。

### S D 004(第21図 図版9)

調査区中央~やや東寄り、F 3・G 3・G 4グリッドに跨がって位置する。S X 003と重複し、本跡が新しい。また土坑数基と重複するが新旧不明。北西~南東に方位をとる。遺構の遺存は不良で、調査区内で途切れる。確認全長は26.4m、幅は50~140cm、深さは最深で40cm。覆土断面は図示しなかったが、ロームを含む暗(黄)褐色土である。下層にロームが多い。遺物は須恵器壺片(1)、古瓦(2)の他、約220点で大部分が古墳~平安時代の遺物であるが、内耳土器など数点の中近世遺物も認められた。その他、板状の鉄片が1点出土した。

### S D 005(第21図)

調査区中央のF 3グリッドに位置する。4基の土坑と重複するが新旧不明。遺存は不良で、北側が判然としない。南側は調査区外に続くが、すぐ谷に下る斜面となるため、あまり延びないと思われる。確認した長さは4m、幅は2m、深さは30cmを測る。底面は比較的硬質である。覆土は1層黒褐色土、2,4層が暗褐色土、3層暗黃褐色土で、1,2層は少量のローム粒、3,4層はローム塊を含む。遺物は内耳土器の大形破片(1)と北宋銭(2)が出土した。その他細片が約130点出土したが、大部分が奈良・平安時代の須恵器・土師器で、中近世遺物は数点である。

### III 遺 物

遺物については遺構の重複が著しく、所属の不分明なものが少なからず見受けられることから、本章では種類別に一括して取り扱うこととした。

#### 1 土器・陶磁器類

土器類（陶・磁器を含む）の記述は、出土状況などは遺構の章に譲り、遺構別にみた全体的な器種やその量の傾向、混入の程度等遺物個々に説明を加えるといった方法をとった。なお、器形の数値および土器の属性はあらかじめ（ ）内に以下の略称で表示し、単位はmmとする。

口径 = C (caliber) 底径 = B (bottom) 高さ = H (height) 腹径 = W (around the waist)

胎土 = cl (clay); 粗 = r (rough) 普通 = a (average) 微細 = m (minute) 混入物等は別記

焼成 = fi (fired); 不良 = u (under) 普通 = a (average) 良 = w (well) 優良 = f (fine)

色調 = tc (tone of color); 褐色 = b (brown) 灰色 = g (gray) 黒色 = bl (black) 赤色 = r (red)

黄色 = y (yellow) 白色 = w (white); 暗 = d (dark) 明 = l (light) 淡 = p (pale) 器肉等は別記

#### A 穫穴住居出土の土器（第22～24図）

• SI001（第22図001-1・2）総点数30点にも満たないが、土師器壺8・小形壺2・杯2、須恵器壺3・杯3個体が識別できそうである。土師器には赤彩した杯が1点、須恵器は器面黒色のものが多い。

1 (C 115 cl=a fi=a tc=lb) は小形壺で、上半部1/4が遺存する。口辺部は緩やかに外反し、口唇下に沈線が巡る。腹は丸みを帯び広い底部が付くと予測される。腹外面は縦ヘラ調整、腹内面は布のような物で横ナデが顕著である。長石微粒子を含み、外面には被火剥離が認められる。2 (cl=a fi=w tc=db) は須恵器大壺の頸部破片である。幅10mmの5条の横描横線の上下に同一工具による波文が描かれる。胎土には不純物を多く含む。混入品であろう。

• SI002 床面のみ遺存する住居跡で帰属は定かではないが、土師器杯2、須恵器壺1・大壺1がすべてである。杯には底部切離し無調整のものがある。

• SI003（第22図003-1～17）総点数300余点のうち個体識別できそうなものを数えると土師器では杯16～17・高杯1・壺8・小形壺4となる。杯の半数はロクロを使用したものであるが、図示した2点の他はより新しく9世紀代であり、他に7世紀の特徴を有した破片も混在する。壺のうち3点は薄い器肉の長腹形、1点は雲母を含むものである。

須恵器は極く少ないが器種は豊富である。杯・高台杯7個体のうち図示した3点はいずれも産地が異なる。壺は5～6点で、短頸壺・長頸瓶・蓋・大壺各1点は優良品である。

1～8までが須恵器である。1 (C 132 B 85 H 40 cl=a fi=w tc=g) は体部1/2欠損する杯

で、直線的に立ち上がる器形を呈す。底はヘラ切り後体下端とともに手持ちヘラ削り調整し、口縁下には巻上げ痕が残る。胎土に雲母微粒を多く含む。2 (C 124 B 96 H 39 cl=m fi=f tc=db) は1/5程度の直角に近く立ち上がり、下端に丸みがある杯である。底から下端は回転ヘラ削りで、器肉は淡褐色を呈す。内外に重ね焼きの痕を示す火棒がある。3 (C 156 cl=m fi=f tc=db) は全体に自然釉が掛かる高台杯で下端の稜は明瞭である。長石粒を多く含み、外面は発色により黒色となる。4 (tc=pg) は大形の蓋片、天井全面に自然釉が掛かる。5 (C 106 tc=g) は口縁のシャープな長頸壺、6 (cl=r tc=lgb) は雲母・長石粒を多く含む大壺片、7 (tc=pg) は薄手の短頸壺、8 (tc=g) は叩き締めの大壺片で、内側に朱が付着する。これらはいずれも胎土細かく、焼成優良なものである。

9~11は胎土に混じりけのない焼成良好な土師器杯である。9 (C 129 B 75 H 39 tc=bl) は完形で底から体全面ヘラ削り、内面は丁寧な磨き、口唇下に沈線様のなで痕がみられる。10 (C 119 B 81 H 45 tc=lb) 11 (B 82 tc=yb) はロクロ使用の箱形である。11の底中央はわずかに窪み、特徴的な切り離しの痕が残る。拓本でもわかるように極めて直線的な平行線が見られるが、現段階では両端を緊縛した状態の静止糸切と考える。10は底がやや突出し、手持ちヘラ削りされる。1も含め底に焼成後刻線が描かれる共通性がある。

12・13・15~17は土師器壺で、胎土に若干長石粒を含むものの焼成良好である。12 (C 163 W 179 tc=lb) は上半部2/3遺存し、13 (tc=lb) は破片、ともに口縁が帯状を成し口唇をつまみ上げている。外縁ヘラ削り内幅広の横なで調整で、内面には煮沸痕の黒変がある。15 (B 90 tc=pb) 16 (B 82 tc=b) は底部1/3の破片で外面は二次被熱で摩滅する。内面15は横指なで、16は縱横ヘラなでを施す。17 (C 202 B 98 W 207 H 250 tc=pb) は底一部を除き完形である。頸は極端に開き口唇部で立ち上がり内に段を作る。均整の取れた器形のわりに底部が大きい。外上縦・下横ヘラ削り後ヘラなで、内上横ヘラなで下なので、全体に丁寧な調整である。外面全体に煤が付着する。14 (C 110 W 118 B 60 H 111 cl=r fi=w tc=lb) は遺存の良い小形壺で、全体に球形を呈す。外上縦下横ヘラ削り、内なで調整、内外面には煮沸痕が著しい。

• SI004 (第23図004-1~7) 総点数でも60余点しかなく、すべて土師器である。図の他個体識別できそうなものをあげると、杯のうちに斜状暗文と無文の浅いもの、受口の残るもの各1、極く部厚な鉢・高杯のはか壺の胴部2~3個体である。

1 (cl=m fi=w tc=b) は部厚な鉢底部で内外全面丁寧なヘラ磨き、2 (cl=a fi=w tc=db) は高杯脚柱のみで杯内面はヘラ磨き後黒色処理される。3 (C 78 H 30 cl=a fi=a tc=lb) 4 (C 70 H 37 3と同) は手捏ね土器で、巻上げ痕が残る。5 (cl=a fi=a tc=lb) は壺の胴片で内面及び側面の一部が磨き上げられ、砥ぎ行為に再使用している。6・7 (cl=m fi=f tc=rb) は内外面磨きのうえ内面に斜放射状文がみられる畿内産土師器片である。

• SI005 (第23図005-1~4) 総点数で230余点、須恵器は蓋・杯などわずか4片である。図の



第22図 SI 001・003 出土土器

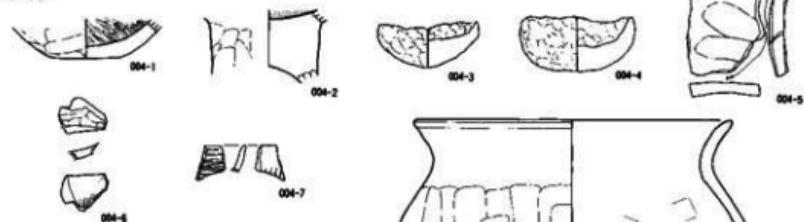
他は細片ばかりで、壺・小型壺各2、鉢・高杯各1個体が判明するに過ぎない。

1 (B 112 cl=m fi=w tc=lb) は1/3遺存の高杯脚部で内外面丁寧なヘラ削りである。2 (C 148 W 170 cl=m fi=w tc=wb) は鉢で外面は荒い横ヘラ削り内面は磨かれる。3 (C 218 cl=a fi=w tc=lb) は1/5遺存の壺口縁部、4 (B 93 cl=a fi=a tc=db) は1/3遺存の壺下半部でともに縦ヘラ削り調整だが、器面は著しく摩耗する。

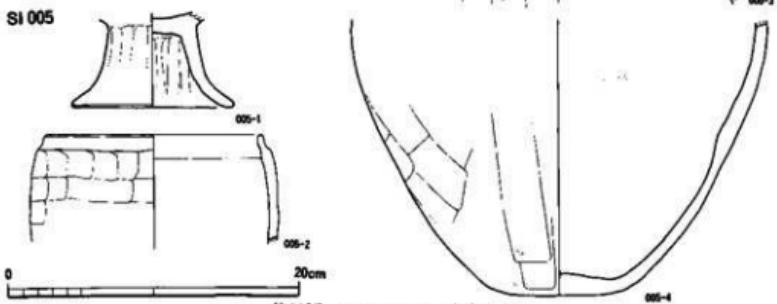
• SI006 (第24図006-1~16) 総破片数1,700点以上あるがそのうち須恵器の割合は5%である。土師器は大量のため、口縁部から個体識別できそうなものを数えてみた。杯では118点のうち浅い丸底形85点で73%を占め、他に受口またはその系統20、ロクロ整形10となる。高杯は岡示したものと同形が10余あり、他に鉢3点も混在する。壺は30個体のうち厚手の大形が大半で、小形品は1点のみである。須恵器は、杯・高台杯・蓋に自然釉の付着した優良なもの8個体が含まれ、大壺・壺の2・3点も優品である。灰釉皿も1個体認められる。

固化した土器でも2の杯以外1/3以上遺存するものは1点もない。1 (cl=m fi=f tc=lg) は比較的シャープな須恵器蓋で天井部に自然釉が掛かる。2 (C 126 H 40 cl=m fi=w tc=lb) は2/3遺存の杯で内面には極細い1段の斜放射状文がみられ赤彩される。外面は摩耗し定かでないがヘラなど調整のようである。11は内面丁寧な磨き外面ヘラなどで、3 (C 120 B 48 H 34) は外面ヘラ削り、内面赤色粘土によるスリップ仕上げか。これらは胎土・色調が2に近似する。4 (B 78 cl=a fi=a tc=db) は外全面ヘラ削り内面一部磨きでロクロ使用の痕跡がある。8 (C

#### SI004



#### SI005

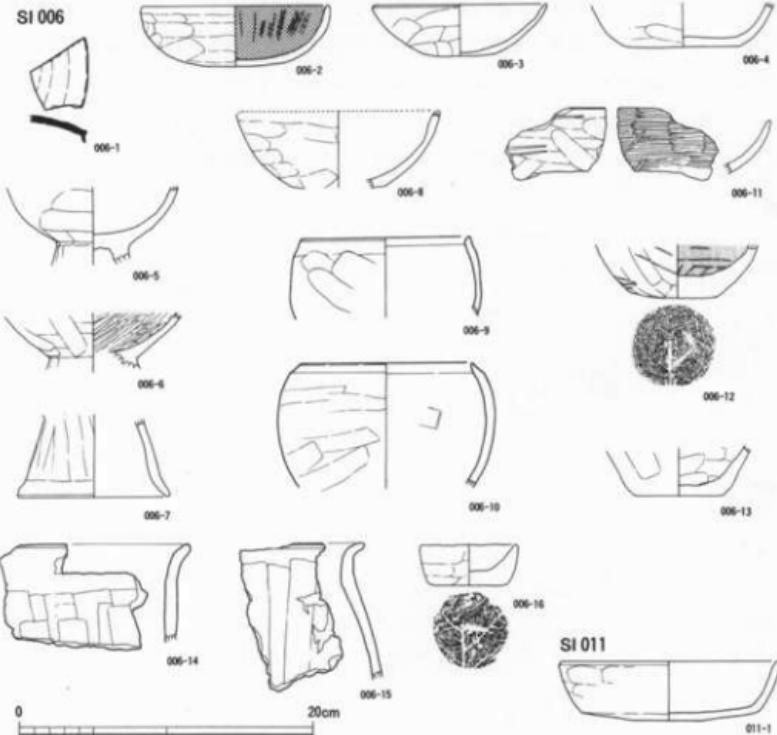


第23図 SI 004・005 出土土器

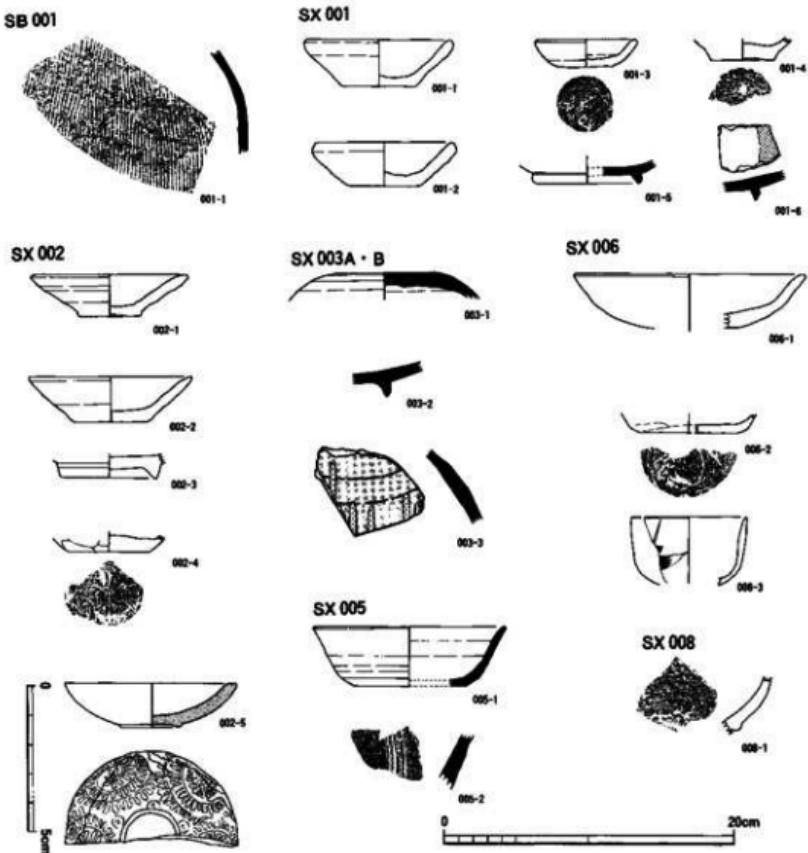
140 B 66 H 52 cl=r fi=a tc=br) は外面荒いヘラ削り内面なで調整の平底杯である。5 (tc=db) 6 (tc=lb) 7 (B 104 tc=lb) は高杯で、杯部は椀形となり、6の内面は磨き仕上げである。9 (C 116 cl=m fi=w tc=rb) 10 (C 119 W 150 cl=a fi=w tc=yb) は口縁で内傾する椀である。いずれも外面丁寧なヘラ削り内面磨き仕上げである。12 (B 58 cl=m fi=w tc=yb) は全面磨きで内面は黒色処理される。13 (B 60 cl=r fi=a tc=lb) は甕底部で内面に指などの跡が明瞭に残る。14 (cl=a fi=a tc=lb) 15 (cl=r fi=a tc=db) とも胴の張らない甕で、荒いヘラ削りである。16 (C 68 H 28 cl=a fi=a tc=lb) は手捏ね土器で、底には木葉痕がみえる。

• SI008 総点数でも20余点しかない。土師器で個体識別できそうなものは、ロクロ使用の杯・部厚な甕・小形甕各1個体であり、他に7世紀代の甕が2~3片ある。須恵器の甕片は叩き目を有す赤焼のものである。

• SI010 総点数で20点もない。土師器で個体識別できそうなものは、灯明皿に転用した杯など



第24図 SI 006・011 出土土器



第25図 挖立柱建物跡・土壙墓出土の土器・陶磁器

ど2点、甕では胎土に雲母の混入したもの・やや小形の甕各1個体がある。須恵器には返しの付いた優良な蓋と焼成の良い灰白色の杯である。後者は永田窯に近似する。

・SI011（第24図011-1）総破片数140点以上あるがそのうち須恵器の割合は10%である。土師器で個体識別できそうなものは、杯では図と同時期のもの2～4点で非常に丁寧な造りである。甕は厚手の大形が4～5、薄手のもの2、小形品は1点のみである。須恵器は、高台杯・蓋に自然釉の付着した優良なもの1個体が含まれ、大甕の2点も優品である。

図は1/4ほど遺存する杯（C 150 H=40 B 125 cl=m fi=w tc=b）で底部はやや丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。外面はヘラ削りのち弱いヘラ磨き、内面もヘラ磨きである。

## B 捜立柱建物跡出土の土器（第25図）

- SB 001 図 (cl=m fi=f tc=db) は須恵器蓋の肩部破片である。外面に横叩き目が整然と並び、内面はなで調整される。

## C 土壙墓・豎穴状遺構出土の土器・陶磁器（第25図）

- SX 001 (001-1-6) 1~4 はかわらけで、3以外は全体の1/3にも満たない。

1 (C 103 B 50 H 32 cl=m fi=w tc=y) 2 (C 100 B 50 H 31 cl=a fi=w tc=lr) は比較的器高のある、部厚な作りで、口縁部でとくに肥大する。技法は器面の摩耗著しく不明である。

4 (B 43 cl=a fi=u tc=lb) の底部には糸切痕が残り、いずれもほぼ同規格品であろう。3 (C 70 B 38 H 19 cl=m fi=w tc=dy) は体部の立ち上がる小形で、水引き糸切技法による。

5・6 (cl=m fi=f tc=pg) は灰釉陶器の底部破片で、爪形の高台が付く。内全面に施釉されたのち6では見込み部分を拭き取っている。混入品である。（なお陶磁器については胎土の色を色調の項に記す）

- SX 002 (002-1~5) 1 (C 108 B 42 H 28 cl=m fi=w tc=lyb) 2 (C 106 B 51 H 31 cl=a fi=a tc=db) は同一規格のかわらけで、全体の1/4ほど遺存する。底部はともに手持ちヘラ削り調整され、切り離しは不明である。3 (B 68 cl=a fi=a tc=lby) は土師器高台杯、4 (B 68 cl=r fi=a tc=yb) は同杯で糸切後底・下端一方向手持ちヘラ削り調整される。

5 (C 59 B 20 H 15 cl=m fi=w) は磁器小皿で糸底、外面には有刺の渦巻文様が5単位認められ、内面及び外口縁に白色釉を掛けている。土師器以外は近世初頭の所産と思われる。

- SX 003 A B (003-1~3) 1 (cl=a fi=w tc=g) は須恵器蓋、2 (cl=m fi=f tc=lyg) は灰釉陶器の高台、3 (cl=m fi=w tc=g) は緑色施釉の古瀬戸瓶で、いずれも破片である。3は15世紀を降らない時期と考えられる。

• SX 005 (005-1-2) 1 (C 133 B 78 H 40 cl=a fi=w tc=dg) は須恵器杯で底・下端は回転ヘラ削り、2 (cl=a fi=a tc=gw) は擂鉢破片で竹棒により「あたり」を搔き上げている。さび釉は光沢がなく、美濃瀬戸の大窯以前の時期が考えられる。

• SX 006 (006-1・2・3) 1 (C 158 cl=a fi=w tc=lb) は土師器高杯か、2 (B 67 cl=a fi=w tc=lb) は糸切後底・下端一方向手持ちヘラ削り調整の土師器杯であり、本遺構に伴うか疑問である。3 (C 80 cl=m fi=f tc=lw) は湯飲み茶碗である。

• SX 008 (008-1) 大形のかわらけ皿 (cl=m fi=w tc=lb) は底部糸切離しで、前述の SX 001・002出土のものに比し古い形式と考える。

## D 土坑出土の土器・陶器（第26図）

- SK 201 (201-1) 土師器瓶 (cl=a fi=w tc=rb) 破片である。

• SK 204 (204-1~3) 1 (B 96 cl=m fi=w tc=wr) は体部が1/2ほど遺存する美濃瀬戸擂鉢で、内面に10条の櫛目が放射状に搔き上げられ底部にも認められるが、工具が竹か否かは不明である。

る。糸切離しのままで、内外全面にやや光沢のあるさび軸が掛けられており、大窓以降の所産と思われる。2・3 (cl=r fi=w tc=db) は古常滑摺鉢の体部から底にかけての破片で、内面には指で押された痕が残り、その周辺はとくに摩滅が著しい。外面には淡赤褐色の発色がみられ、同一個体の可能性が高い。

- SK 205 (205-1) 須恵器杯 (C 139 B 90 H 38 cl=a fi=u tc=rb) で底・下端は手持ちヘラ削り。

#### E 溝状遺構出土の土器・陶器 (第26図)

- SD 002 (002-1~3) 1 (cl=a fi=w tc=g) は須恵器広口甕破片、2 (cl=m fi=f tc=g) は

SK 201



201-1

SK 205



205-1

SK 204



204-1



204-2



204-3

SD 002



002-1

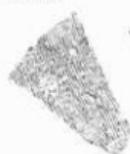


002-2



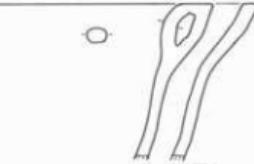
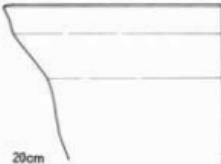
002-3

SD 004



004-1

SD 005



005-1

0

第26図 土坑・溝状遺構出土の土器・陶器

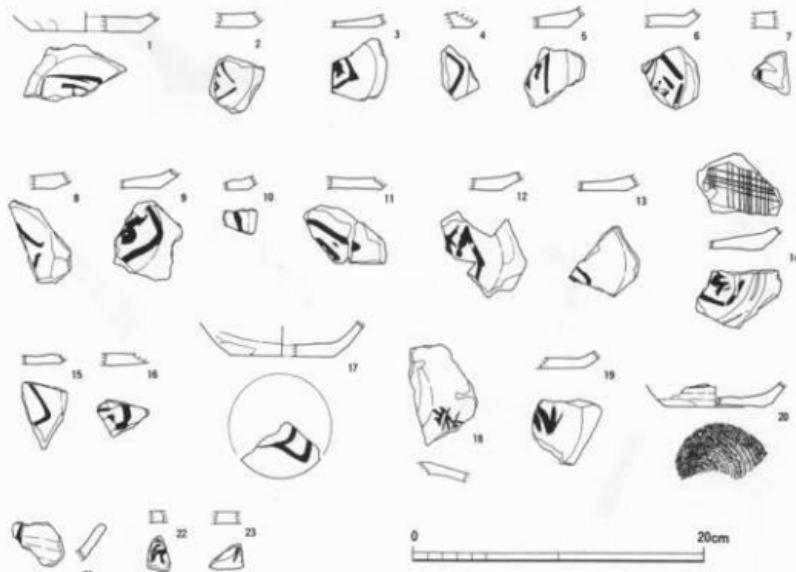
須恵器大甕破片で外面には黒灰色の発色がみられる。3 (cl=m fi=w tc=lg) は陶器大甕の破片で頸部には黒灰色の発色が、肩部に降灰釉がみられる。

- SD 004 (004-1) 須恵器大甕 (cl=m fi=f tc=lg) の肩部破片で、湖西産と思われる。
- SD 005 (005-1) 内耳鍋 (C 300 cl=a fi=a tc=dg) の1/5ほどの破片である。内外全面黒色を呈す。口唇部分は丁寧に撫で付けられ直線的となり、口縁部は大きく開く。内耳の幅は12mmほどで振り付けた後口唇の調整を施す。鉄鍋出現に近い時期のものであろう。

#### F 墨書き土器 (第27図・表1)

本遺跡からは合計23点の墨書き土器が出土している。出土地点は土壤墓・井戸跡・溝状遺構及び表1 墨書き土器一覧

No.	器種	cl/fi/te	整 形・調 整	出 土 地	No.	器種	cl/fi/te	整 形・調 整	出 土 地
1	不明	a w lb	底・下端手持ヘラ削	SX001-1	13	杯	a w b	底・下端手持ヘラ削	SD002-4
2	杯	a w lb	系切底・下端手持ヘラ削	SX002-2	14	杯	m w pb	高台付 調整不明	SD003-1
3	杯	m w wg	底・下端手持ヘラ削	SX003-2	15	杯	a w rb	系切底・下端手持ヘラ削	SD003-2
4	杯	a w lb	底・下端手持ヘラ削	SX003-1	16	不明	a w pb	系切後調整不明	SD005-1
5	杯	r w pb	底・下端手持ヘラ削	SX005-3	17	杯	r a rb	系切底・下端手持ヘラ削	Grid-?
6	杯	r a lb	系切底・下端手持ヘラ削	SX005-3	18	蓋	m w lb	内外全面磨き仕上げ	Grid-G4
7	不明	a w pb	系切後調整不明	SX005-3	19	杯	m a pb	底・下端手持ヘラ削	Grid-J5
8	杯	r a b	底・下端手持ヘラ削	SE002-1	20	杯	r a rb	系切底・下端手持ヘラ削	Grid-I4
9	杯	a w pb	底・下端手持ヘラ削	SD002-3	21	杯	a a b		Grid-C2
10	杯	m w lb	底・下端手持ヘラ削	SD002-3	22	不明	a w pb	不明	Grid-G4
11	杯	m w wb	底・下端手持ヘラ削	SD002-3	23	不明	a w b	底・下端手持ヘラ削	Grid-G4
12	杯	m w lb	底・下端手持ヘラ削	SD002-4					



第27図 墨書き土器

びグリッドで、いずれも覆土内に限られ、出土した遺構の性格からみて混入の可能性が高いものばかりである。

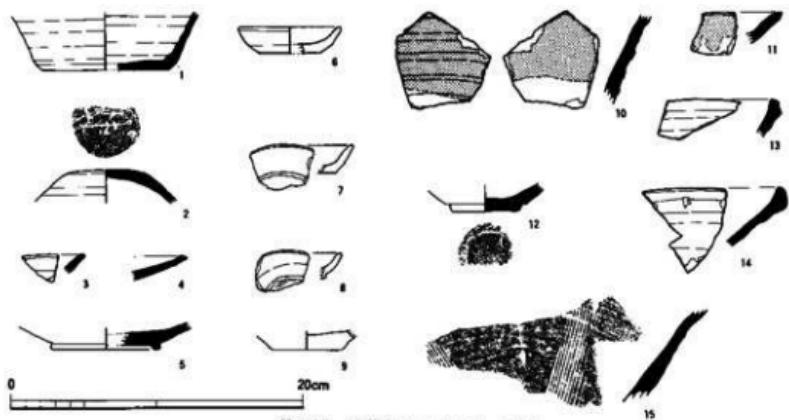
土器はすべて土器で、磨き仕上げがなされた14の高台付杯・18の蓋は8世紀後半と思われる。また17・20は9世紀前半の特徴を有し、9はやや古く6は中頃の所産と考えられる。表で示したとおり杯では糸切の後底から体下端を一方向手持ちヘラ削りする技法が多く、6・7・20では糸切痕が明瞭に残る。

墨書きされた部位は20・21が体部、18が天井部のほかは底部外面に比較的大書しているものが多い。判読できるのは18の「山万可」のみである。これは中峯程度の筆で縦書きされている。その他のうち1～6・8・9・11～17など国構えとも考えられるものが注目される。

#### G 遺構外出土の土器・陶器（第28図）

1 (B 86 cl=a fi=w tc=g) は須恵器杯で、ヘラ切後底・下端回転ヘラ削り調整する。外面一部に火捺痕が残る。2 (cl=m fi=w tc=g) は須恵器蓋の天井部で、ヘラ切後天井上半回転ヘラなでを施す。3～5 (cl=m fi=f tc=wg) は灰釉陶器皿で、内面に施釉され4はとくに丁寧な作りである。6～8 (cl=a fi=w tc=pb) はかわらけの小皿で、水引糸切離し無調整。近世初頭のものか。9 (B 48 cl=a fi=w tc=prb) は不明だが肉質からかわらけと思われる。

10 (cl=m fi=f tc=wg) は古瀬戸大鉢で、刷毛塗の灰釉が黄灰色に発色する。11 (cl=a fi=f tc=w) は瀬戸小皿で、緑黄色の施釉はどぶ漬けによる。口唇に煤が付着し灯明皿として使用したことがわかる。12 (B 47 cl=m fi=w tc=pg) も瀬戸平碗で、作り出し高台に糸切痕が残る。内面に淡緑色の釉を施す。いずれも中世末に近い時期の所産である。13～15 (cl=m fi=w tc=wb) は美濃瀬戸擺鉢で、金備による搔き上げがみられるものもある。内外全面光沢のある紫がかったさび釉が施され、大窯直後の製品と思われる。

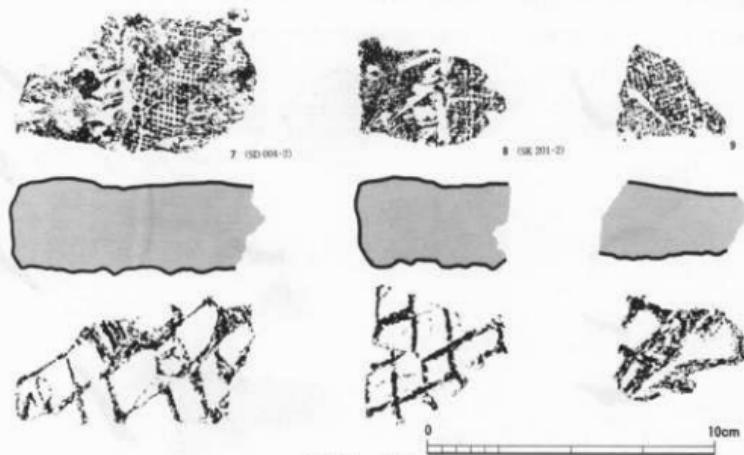
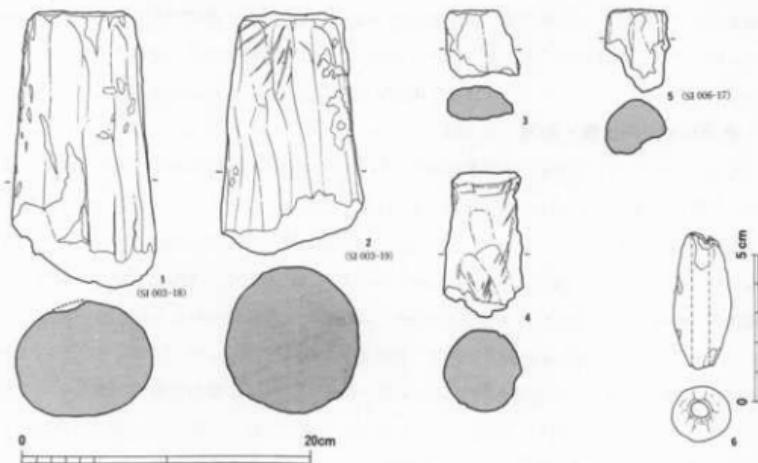


第28図 遺構外出土の土器・陶器

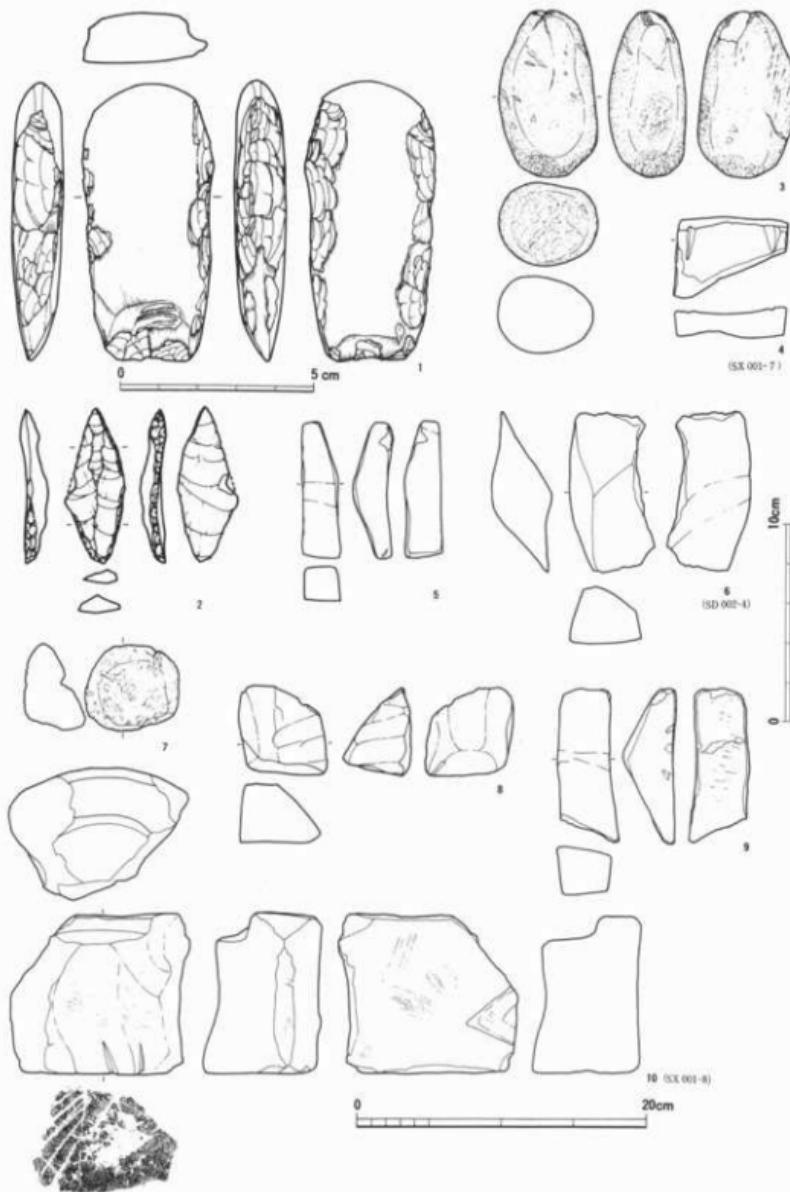
## 2 土製品・瓦（第29図）

支脚は1～3 (SI 003) 4・5 (SI 006) である。いずれも胎土にスサが混入され、良く焼けた褐色を呈す。1～3は表面をヘラで削って面取りし、他は手捏ねの状態である。6 (SX 002) は長さ48mm、重さ13.9gの土鉢で、上端の一部が破損する。

瓦は7 (SD 004 cl=a fi=f tc=rb) 8 (SK 201 cl=m fi=f tc=pb) 9 (SX 006 cl=a fi=a tc=rb) である。いずれも原位置を保つものとは思われない。粘土板を二重に合わせた平造り



第29図 土製品・瓦



第30図 石製品

で、表面に布目がみられその端はかがられている事が解る。裏面は格子目の叩きしめがなされ、いずれも非常に軽い。

### 3 石製品（第30図）

1は長さ96mmの硬質砂岩の打製石斧で側面を打ち欠き握りとし、表裏面は丁寧に研磨される。刃部は使用による欠損が著しい（SX 002）。2は重さ2.53gの珪質頁岩のナイフ形石器で、表側面を細かく加工し刃部は鋭い（SK 050）。3は重さ244.5gの硬質砂岩製磨石下端に3面、上端の一部に使用痕が明瞭である（SK 110）。これらは出土遺構の性格から判断して混入品といえる。

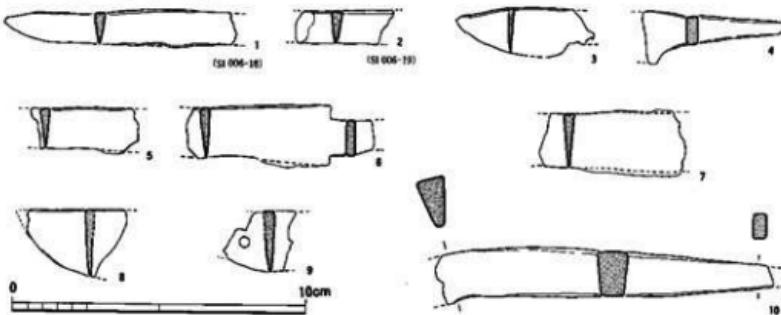
4は幅57mm以上の石礫の陸部破片で両側面に幅6mmの縁が切り出され、中央は深くへこみ使用の跡が窺える。破損後には図の上端を何等かの研磨のため再利用している（SX 001）。

7は軽石で図の下端のみ使用痕が明瞭である（SI 003）。10は直径20cm強の砂岩質の上臼破片で幅25mm、高さ10mmほどの縁が削り出されている。下面是光沢のあるほど研磨され、樹枝状の摺目も一部遺存するのみである。破損後上面を除き砥石として再利用される（SX 001）。

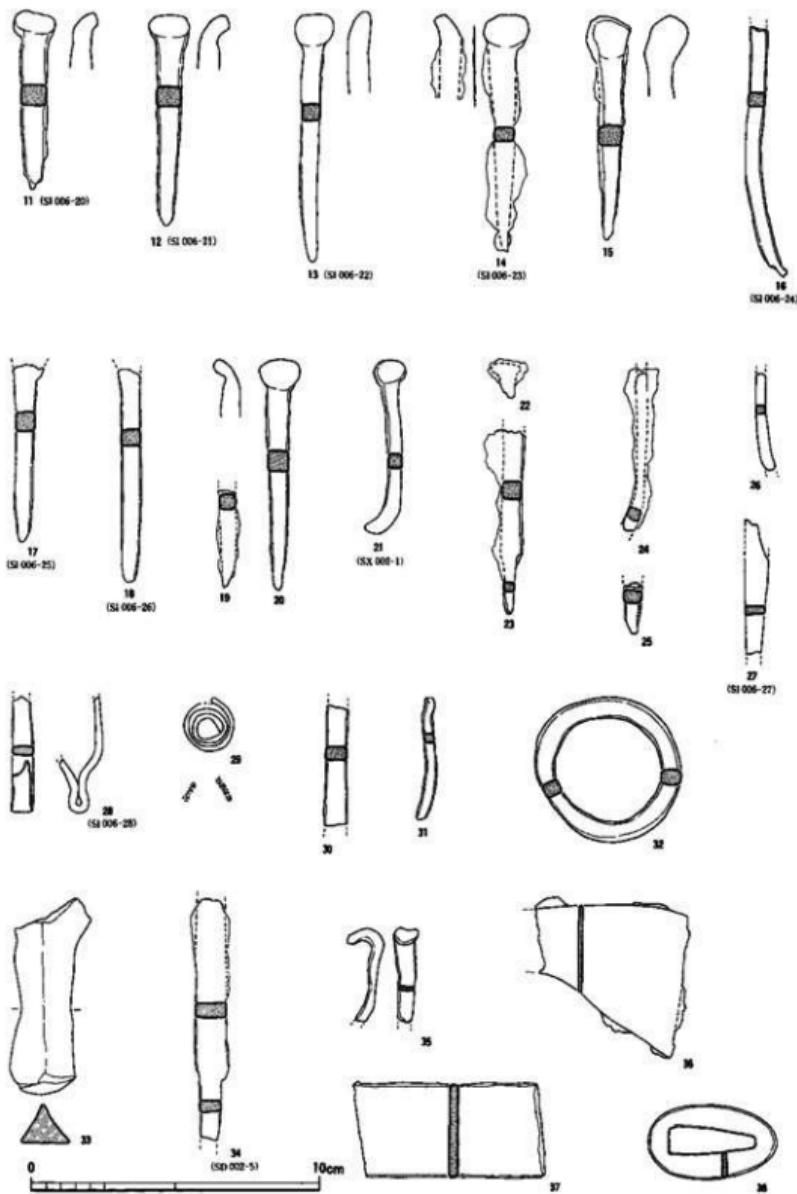
その他は凝灰質の砥石である。いずれも一部欠損後も手持ち砥石として全面使用されている。出土地点は5（表採）6（SD 002）8（SI 011）9（SX 002）である。

### 4 金属製品（第31～33図・表2・3）

固化したものは43点で銅製品1、錢貨5点の他は鉄製品である。とくにSI 006からは刀子3、角釘7、他4点が出土して注目される。またSX 002には軋他2点とともに景德元宝を、SX 007には永楽錢を認め上限が推定できる。削工具としたもののうち木部に装着する釘穴が遺存する1点があるが木質は認められない。10・32～38などは出土状況・遺構の性格、鉄分の遺存度から新しい時期の所産と考える。また性格不明のなかには落し残用の鎧かと思われるものもあり、今後に課題を残す。



第31図 鉄製品

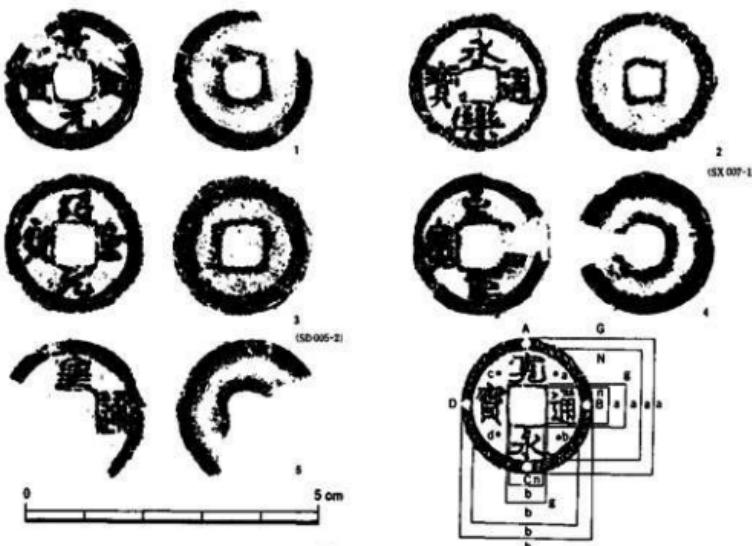


第32図 鉄製品・銅製品

表2 鉄製品一覧

No.	品名	部 分	長 mm	重 g	備 考	出土地
1	刀子	刃先	78+	10+	厚細身	SI006-12
2	刀子	身	+34+	3+	厚細身	SI006-30
3	削工具	刃先	46+	4+	延減りあり	SI010-1
4	刀子?	茎	+48	7+	木質わずか	SI003-1
5	刀子	身	+36+	6	と同一?	SD002-6
6	刀子	身区茎	+64+	21+	延減りあり	SD002-6
7	鑼?	身	+47+	11+	薄身	表採
8	削工具	刃先	33+	3+	薄身	Grid -G3
9	削工具	刃先	24+	3+	釘穴あり	Grid -H4
10	鑼	完形	115	78	刀先欠損	SX002-7
11	角釘	先欠	61+	14+	平打頭	SI006-9
12	角釘	完形	74	13	平打頭	SI006-14
13	角釘	完形	86	14	平打頭	SI006-20
14	角釘	完形	84	17	平打頭	SI006-16
15	角釘	頭欠	+78	14+	遺構外	SI006-29
16	紡織具	紡芯?	+90+	9+		SI006-4
17	角釘	頭欠	+62	7+		SI006-3
18	角釘?	頭欠	+73	10+		SI006-2
19	角釘?	一部	+30+	3+		Grid -J5

No.	品名	部 分	長 mm	重 g	備 考	出土地
20	角釘	完形	80	14	平打頭	Grid -B1
21	不明	上下欠	+60+	6+		SX002-1
22	釘?	頭			T頭	Grid -14
23	鑼	茎	+62	18	銅被45+	SD002-2
24	紡織具	紡芯?	56+		丸みあり	Grid -14
25	釘?	先				Grid -F3
26	不明					SI006-1
27	刀子	茎	+50+	7+	刃区遺存	SI006-17
28	不明		40+	4+	縦通穴?	SI006-7
29	不明		径17	3+	螺旋状	SI006-1
30	不明		+42+			SI003-1
31	不明		+44+		丸みあり	Grid -G3
32	環金具	完形	徑52	21		SX005-2
33	不明		+68	60+	鉄鍋脚?	SI006-1
34	不明	身茎	+82+	19+	木質わずか	SD002-2
35	不明	半輪	32	3+		Grid -D2
36	不明		50+	15+	三角板状	SD004-3
37	不明		65+	21+	延板状	Grid -J5
38	銅黃金	完形	44	9	銅製	Grid -H4



第33図 錢貨

表3 錢貨一覧

No.	錢 貨 名	初 銄 年	代	W g	G mm	N mm	g mm	n mm	T mm	I mm	出土地
1	景德元寶	北宋	大中景德元年(1004)	1.96	24.31	18.11	7.20	6.25	1.10	0.55	SX002-5
2	永樂通寶	明	永樂6年(1408)	2.34	23.92	19.50	6.79	5.45	1.19	0.65	SX007-1
3	紹聖元寶	北宋	紹聖元年(1094)	2.08	23.97	18.30	7.50	6.95	1.00	0.80	SD005-2
4	皇宋通寶	北宋	寶元2年(1039)	2.26	23.79	18.81	8.16	7.09	1.06	1.00	表採
5	皇宋通寶		◆	0.88	24.90	20.00	—	—	0.98	0.83	SK001-1

## IV まとめ

検出した竪穴住居11軒は古墳時代後期から平安時代にわたると思われる。土砂崩れの危険により十分に調査できなかったものや、遺存状態が不良なもの、また、路線内の調査のため完掘したものが少ないので、詳細な時期については不明な竪穴住居が少なくないが、調査区全域の出土遺物の様相や遺構の状況から、この期間内には収まると思われる。以下、出土遺物や遺構の状況から構築時期を考えてみたい。

古墳時代後期に比定できるのはS I 004, S I 005の2軒である。ともに完掘ではなく、遺物量もさほど多くないため一抹の不安はあるが、遺物は古墳時代後期のものが最も多い。住居の時期も古墳時代後期と考えたい。住居の規模は004が4.65m、005が4.25mと比較的近く、主軸も北東方向と近似する。ただし、004と005は非常に近接して位置するため、同時存在は不可能であると思われる。

8世紀代に比定できるのはS I 003, S I 006の2軒である。S I 006は古墳時代後期や平安時代の遺物が混在し、特に古墳時代後期の遺物量はかなり多い。しかし、内面赤色塗彩の土師器杯(2)が比較的大型の破片で床面もしくは床面に近いレベルであることや、須恵器供膳形態に折り返し口縁の蓋が圧倒的に多いことなどから、S I 006の構築時期を8世紀第1四半期と比定する。S I 003は出土遺物の様相から8世紀第3四半期に比定できよう。

他の7軒については遺物が得られなかつたり、あっても量が少なかつたり、細片が多いために詳細な構築時期が不明であるが、大まかに捉えられるものがあるので、それらについて述べる。まず、S I 011は図示した土師器杯は8世紀第2四半期ぐらいに相当すると思われるが、この杯の遺存度はあまり良くない。図示しなかった遺物の中には9世紀代のものも認められる。調査区外に未掘部分を多く残すが、以上の状況から8~9世紀の構築年代を想定する。S I 001の出土遺物は8世紀代のものもあるが、9世紀代のものがより多い。遺構の遺存状況が悪く遺物量が少ないので、遺物から住居の時期を断定するのは危険であるが、住居が小規模ということもあり、一応8~9世紀代の可能性のある住居としておく。001, 011以外ではS I 002、S I 008は平安時代、S I 010は古墳時代~平安時代の遺物を出土しているが、遺物量が僅かであったり、遺存の良い土器片が出土していないため、詳細な時期は不明とせざるを得ない。S I 007は未調査により出土遺物が無いが、カマドを有し、主軸方向がS I 008やS I 010と近似することから、S I 008と重複するものの、それらと比較的近い時期の構築であるかもしれない。S I 009はS I 007同様に出土遺物が無く、遺構の多くが調査区外であるので、時期は全く不明であるが、周囲の状況から一応、古墳時代から平安時代の間には収まると考えておきたい。以上をまとめてみる。なお、?は不確実であることを示す。

古墳時代後期	S I 004, S I 005	8~9世紀	S I 011
8世紀 第1四半期	S I 006	8~9世紀?	S I 001
第3四半期	S I 003	詳細時期不明	S I 002, S I 007, S I 008 S I 009, S I 010

となる。ところで以上の堅穴住居群は、調査区中央から西側にかけて位置し、東側には空白地域が認められる。しかし、墨書き土器片の分布を見ると、調査区東側に位置する土壙墓や溝状遺構、グリッド等からほとんどが出土している。調査区東側では遺構が確認しにくかったこともあり、中近世の土壙墓等、後世の營為により破壊された堅穴住居が存在したと思われる。先にも述べたが、調査区外の台地全体に古墳時代後期から奈良・平安時代の集落が広範に展開するものと考えられる。

調査区東半部では土壙墓・堅穴状遺構、地下式土壙、土坑群等の遺構が分布する。これらの遺構を概観して想起するのはいわゆる台地整形区画遺構および区画内の遺構群である。本遺跡の場合、路線内の調査ということもあって調査区内では明晰な台地整形区画遺構を見出すことができなかった。しかし、台地整形区画遺構が検出された遺跡では土壙と地下式土壙の組み合わせが共通して認められ、本遺跡でも検出されていることから、調査区外に存在する可能性が考えられる。個々の遺構のうち、S X 001は堅穴内のピットの形状から千葉市西屋敷遺跡100号跡に近似する遺構である。西屋敷100号跡は掘立柱建物で、墓との関連は薄いと報告されているが、再検討の必要があるようと思われる。ところでS X 001をはじめとした調査区東部における近似した遺構の幾つかについて、これまで墓として記述してきたが、人骨など直接墓であることを示す出土遺物が無く、地鎮遺構など他の遺構である可能性も捨て切れない。しかし、最も良好な形で保存したS X 001を見ると、大阪府喜連東遺跡で発掘された墳墓堂遺構(S X 01)と方形プランを有する点で共通し、該種遺構についてはより墓跡である可能性が高いと考える。

## 註

1. 「千葉市西屋敷遺跡」(財)千葉県文化財センター 1979
  2. 伊藤智樹「土壙群を伴う堅穴状区画について—台地整形区画に關連して—」『研究連絡誌』第17号 1986
  3. 「岡遺跡」(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1989
  4. 藤澤典彦「中世墓地ノート」『佛教藝術』182号 毎日新聞社 1989
- 中世の墓地・地鎮遺構については特に小林清隆・笛生衛・井上哲朗の三氏に御教示を受けた。

# 写 真 図 版





1. 遺跡遠景（南西から）



2. 調査前近景（東から）



1. 調査前近景（東から）



2. 調査前近景（西から）



3. S 1003カマド土層  
4. S 1003カマド  
遺物出土状況





1. S 1004 + 005全景



2. S 1004全景



3. S 1011全景



1. SB004全景



2. SX001全景



3. SX002全景



1. SX003A・B全景



2. SX004全景



3. SX005全景



1. SX006全景



2. SX007全景

3. 調査区東部の遺構  
および発掘風景



1. 土坑群 (S I 003周辺)



2. S D 004および  
周辺の土坑群



3. 土坑群  
(S X 003・004周辺)



1



2

1. SK 204全景

2. SE 001



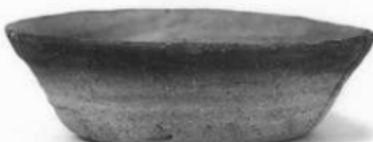
3

3. SF 001全景



4

4. SD 002



3-1



3-10



3-12



3-13



3-15

S 1003

出土遺物



3-16



3-14



5-4



4-4



6-2



S 1  
003  
004  
005  
006  
出土遺物

5-1



6-16



1-3



1-2



S X  
001  
002  
出土遺物

1-1



2-1



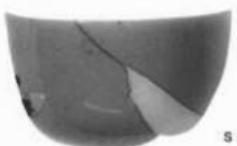
SX 2-5



SX 3-3



SX 5-2



SX 6-3



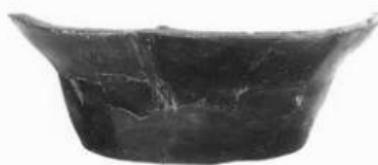
SX 8-1



SK 204-1



SK 204-3



SD 5-1

SX・SK・SD出土遺物



2



3



4



5



7

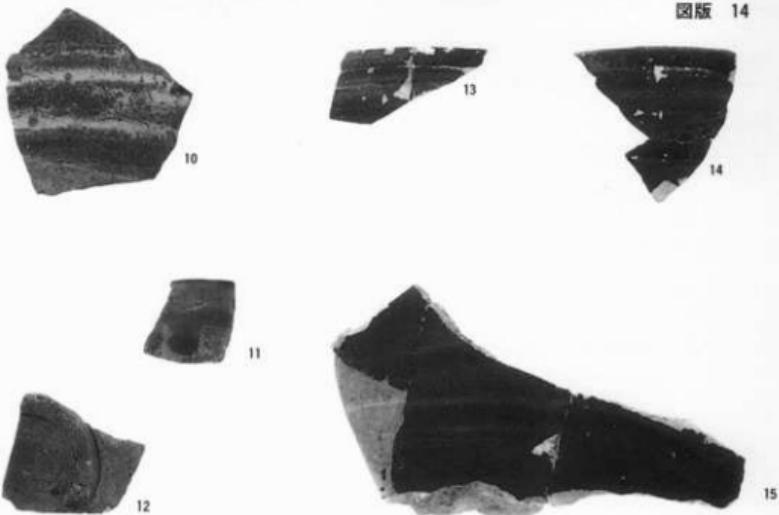


6

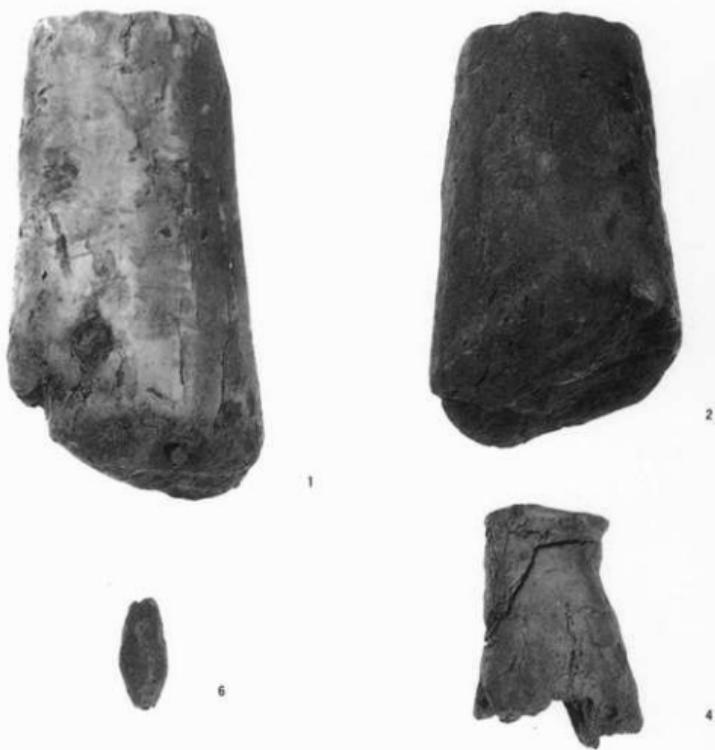


8

造構外出土遺物



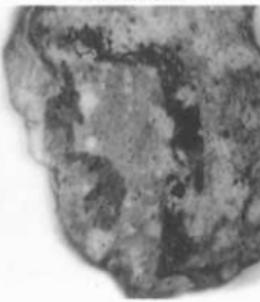
遺構外出土遺物



土製品



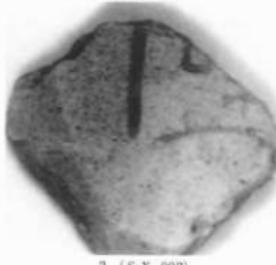
1 (S X 001)



9 (S D 002)



11 (S D 002)



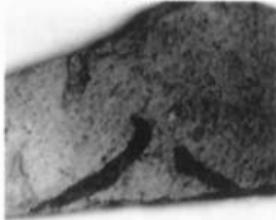
2 (S X 002)



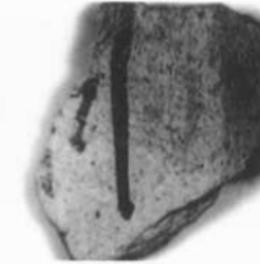
12 (S D 002)



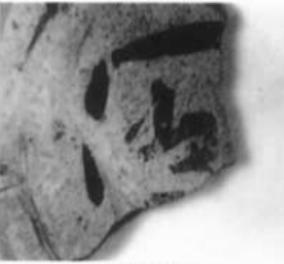
6 (S X 005)



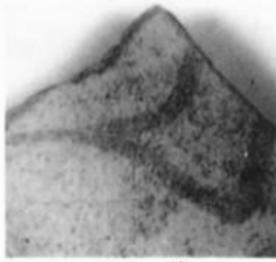
8 (S K 204)



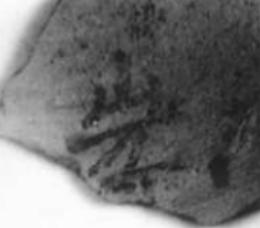
5 (S X 005)



14 (S D 003)



17 (表 採)



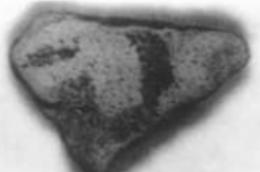
18 (G 4)



19 (I 5)



3 (S X 003)



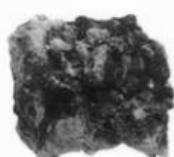
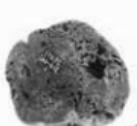
16 (S D 005)



22 (G 4)



1 鉄製品  
2 銅製品  
3 錢貨



1 瓦  
2 石製品  
3 炭化米



千葉県文化財センター調査報告第208集  
**東金市井戸ヶ谷遺跡**  
一房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—

---

平成4年3月25日 印刷  
平成4年3月31日 発行  
発行 水資源開発公団 房総導水路建設所  
山武郡大網白里町大字池田455  
編集 財團法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡無番地  
印刷 株式会社ライフ  
成田市東和田595

---